厄日本紀事

四 上下
五 上下

洋学文庫
文庫8
C 267
4

遭厄日本紀事巻之四上

目次

松前牢舎の事
ましゑて松前の城中よ呼出さるゝ事
再度城中へ呼出さるゝ事

41- 7900

厄日本紀事巻之四上

杉田豫
青地盈　譯
髙橋景保校

[stamp] [stamp]

松前牢舎の事

松前の我等か居る獄舎の様子を見て予か日本人の為る事
甚手をつくしと見えて天晴る時も内の方はくらし
獄舎の周りに板塀を環らし其内に牢屋あり
何れも新しく造りしと見えて未たかしこに木屑の
落散りたるも未掃除せすしてあり 彼のよき材木にて

造り昔日より無少くさしとて今我身をも危しめし
亜さんは彼のおきて大昔より起りし事をふるき事なり
たとひ百年前よりも尚是今年の法にもあら
ん今期のおきて聖人の教にも生涯日にもあらじあるまき
設けたる為に思ひかへせども我に何ぞ其罪無し
いかんのとふ以て是ゆらし〳〵共に息しけり
合せて随分にて能く為す國に行ふ事是を役に據る又は彼がのみ子
の法りとせし〳〵のまゝある者にあらぬ事の偶の事をあらし
此れ人のとふにけるもしらず持ち彼の國を我の実に是を能く常にある
此書モール上に説く所を見るにそれを書してモール國の教を見て

何処を斯く様にて以て是のかの故にて国をゆして宮中に於て西ひ萬般
此の様の事を云ふモール人の体の自に萬般の取り事なし
也とも云ふは國はモールは已に古くから此かしてはい紛れて候ひ
とうしても此等の事の道にて猶ほしのち次に猶其の日本
人の為にてしも萬般の事ゆる萬にて止まる事を深く論せし
亦人の日本人の為に於ておのれ此者と云ふを我が為ある人
何ぞして那しと云ふへし事あれは彼との心持ち道
其人の成て道を以て外国の人とも西に随てウカく
以其てふせるのうちを日本人の為ある我
其れ理まて多くの人とも思へるも又其事の

本船へ帰し 由て彼等はホーミシトフと云者を捕へ首領様
以前より引続きしや或は日々に修補して彼等に示すや
其実否を詳にする事わかり難し
獄屋の様子は長さ二十五歩 闊さ十五歩 高さ二尋
許ありて 三面共に壁にて外しの際より只東面
ところ計りにて闊さ四間余にして構ふののみ
なりとし 此に引戸と耳門（クヾリ）あり 此耳門は鎖を以て鎖せり
此所の中央に二の室あり 其大さ計
構子の外に周りに廣さ長さ六歩 廣さ
手代あり 其上をモールヘレブニコフの三人は

広くし 其内に長き室 廣さ四周し
此所にアレキセイ 及び其外の者 住む 此二の
室の内に構へて隔て 其外と二互に
見えざる為め 室の内にて甚低く 僅に
這入る程也 此に大なる櫁（クロヽ）木に鐵の鎖を附し
一尺四方にして 此より飲食を入る 又
壁の様に座あり 其形小に外と寄り 座る
又獄の外に番所と 又室の側に番人あり
官の図に二人ツヽ 替り番して 常に其所に
ことなし 獄屋は七八日毎に周りに掃き

城内の口と云ふもの東の方に小さき門あり此所
のみに橋あり此所は平地にして高き処と厨(くり)
房(や)と作(こしが)り所のぬきあり此守り居る津軽家の
臣此に居ましむと云城の中城内へ入て其の
本丸の外周は東西南北の根にたてり見所
黙して通る時船をとゞめて内の者出る人在り此と
二重にして東西南北の字の外周は出て枝子の外
より内を見ると云ふもの有此所にて岸になし
下る方に流れ小川あり此水は流れて出る
ありて城の内外と隔つ其のけしきなどなり了

道まして家内に留まりし時雪の上に積みて絶へたる
所なく皆血中の如くなるにありて光の隔し積し
枝の所より家中の出入にて来る者にまぬして
其の中に居て隔し海をとりて物事隠れり
東西に南北通りての臣の標をと出して
然されてと言も成ぬる
帰しき事は言ふ
安眠させる事を思ひける也
扨て松前の城下に咲事
第十月一日 秋八月廿六日 晴れて我等

よく成たる者あり里二ヶ所年銭にて召出せし
時ありし似し此者より寺の恩徳を承り住ひ行き
塔の門に宦らある道を通り堺の東門よりある獄舎へ
に二所錠あり内より出入り道なしされば
扨もとありて出入もとありしき二也上戎出に華麗
うけて有りかしこにて出入もとありる広き土蔵あり
一棟の也ある橙あるにつまのりて其一列に並び
在て繕しと雪時あれはして大なる門を開きし内に住
の家三の座庭の内より出入りきなる所同心ともに自
十方刀と戸鎖もと残さるなり

日本人にて職（ナカノツ）も皆も用ひ兵具来る者の
者にて組さる腰をまとん金
門の後にて家来まも職もと役も具より画書なる禄き
座専より候の者にみ在しむ基本の家族の風にて
此様にて座専の間の陽もとかし開閉なる役を作あり
主は亭とモールヘレブニコラと橙に雪しなれまのかなる
我本りは頭儀き完にある家来の方にアレキセイを
置き左にて獄屋にて給仕なる者二人ともに居りて与者
通りの世話あり獄屋まで付り給仕なる者の用儀羅
割役成分りたるんと思われる者二人あり一つ人にて深も

と称し一人ハ梅松と称し
みな我の方に無二中なり彼二人の男ハ香車と
吉原の町に通ふ事任せしかども彼力にて此通
籍にて足る事なしとなり
此度ハ其座敷の間毎に紙の様なる板障（イタト）なりしを
金箔をもて貼りして山水の金銀等にて花などを画けるものあり
またこれ毛もて書き村まで龍の像などを彫鏤しくるものあり
あり又欄間に彫刻をしたるあり床にハ白き毛氈を
あり傍に若衆の衣装を着し緋縮緬の帯をしめ
傍に太刀を置きたる者五人ありしがやがて

其中の出る袴を脱ぎ始むる時（一刻の四分なる）ときのまゝ此時
様の陰にて多くの人集まりて何事かん気配にて
前に控居たる一人ハ一人ニ七イと唱ふに従ひて忽ち
其立ち上り一人の男なる様の所に侍りしてあたり放ちき
傍にいる此時吉原と云へ黒き紫縮緬の袖に紋を
付けたる衣を着し帯の如き緋縮緬の袴を着し鹿の皮の
太刀を持ちて其身を帯びて太刀の柄のこの所を
縫ひ取りて持ちて其処に出て前に参りて上座に
着くと太刀持てる者従ひて太刀を其の左
傍に置きて退きたり而して前人ハ頻りに手をつき

郎と待つるゝ九二為め時（保拇丸二三ノ息の弓）のやうに字よ
れたる事なりとも又餘頭はたゞ体を座の上にて我
膝の上にて滑きて落れたり我未だ欧羅巴の風まて
彼よりれ未だ知らざる彼黙郎笑をなしたりしおれまて
親しく帝は之を見て驚きおもれて時に之が為めて
其手に懐中より機をと取出して見て我手に合ぜ
逐に于て座ひしたるは甚だも隠しく立て轉し
暫くして彼又源七に向ひ何をかん言ひたりて源七
後郎にして彼は其の前を呼びて我手に向て
通辯せしめしとも彼等は何事か解し得ず

無し其言語も人なり我も人なり彼も人なり我
の前に人なりやと云ふ者ひとり源七の言ひ
傍の通辯の未だ學び得たる所源七はまたも
其手に思ひを隔つる程に明かに彼の通辯の役に
出来ざるは源七にて云ふに源七の頭を傾けき
呼びて其を取りて其れに命じ何か人通辯
せし上にて二人の書記役なる者別席にて源七を
調べたる者が思へる程にして其後之を記せり
我が國の源七が理由を聞かるべきをもちて
之れ其書我れに調べを解せる様に言はず出でてあると

セらぬ月ある害をも引出さんも計りかたしとおもひ
親王ヶ事にて保かへるへかへしと止むましけれとも彼持
所領ともも能々見きまさき何廊ん面通覧せし称まて
出紀役又出来しを記しかしてハ又新る関を遣はし
しむ事甚有アレキセイニ向ひ然らハ事ニモあれ
彼ハかしまして甚り城歟むる城遂ニすまりて見
あらさきは体面しと然れとも然れ事ニハ上常の命
あられさる者ニて上まし営へ乃ん私ありけれハ自
然モよ向ひ事とる領のを保護居りまては何とる問
息し八源モ處ニて懐ヤまり小舟を本出し揺り

出て見て終ニ其領を奪ひ及と覚へらるまゝ有り
然るに彼の後人も意之程さに契ひ歟の好き者の領
も郡々父母として源モを退け然る所とアレキセイニ
通事セしめ源モ出ニ帰ニ来て来り事ニ承候
破しむ
是ニ於て案内ニ及ひしめし関所に於さしめ来ル
然ル處其父母は兄弟ニ其母の事ニ通し事
しかるに其用ニ我らの兄弟の然ル年の蔵書ニ有
通して出紀モり是等の時を皆ニ判自ら関役
本モリ又レサノフヶ月某ニよりて通りたる針路彼ら

日本人に見れる訳にも不法様の事成難く聞え了其内に
俄羅斯人の葬式墓所の表に都て多く様の別あり
やまと云えり亭主人の葬まて僧も人出て墓所に
葬れと云えり然ハ其れ日本まても同しき事
成と云ふ了孫にも其れ云你不何に成り候き
事ありやと申と亭主是にて了解せし様子にて答ふる事あり
是や今ある様あれて国と云ふ事に宇内まで数
さましんと思ふもして何事も其所によりてつき
をも宇中と聞くとして其れ云ふ魯西亜像様
疑わしく物にゐたるまま日本書にも書ありならんと

故にさまたる申と亭主に我まで承りしに二百
あり了年国に法ありし了まてと
國にも依まりん八公まて保人より更に死人事と
郊外のきと云ふ所あり其れ云ふ感じしるまで
像人に命し其しり亦人傾き随て各
盛大なるありし金まで背像點の様と云せりアレキセイ
其他の祠ある如て精し其事成節をの本の御文も成
彼のクリル祠まて云れるまで公まてもなきもの
亡やるまでくまて日本人の心も御上て御す国事なりて
欧羅巴也人に幸事なりて云は海まても四恋なるす

去る程なりしとて夏より冬へ向ひしハ審しからず
間ひ知りやしくハ宝を所成かし事ならホーシトフ（本ノマヽ）
の所為なり全く彼ハ一色に出くるゝに迷ひ居りきるに極
らハ米菓形年の食料を与へ本国に帰る處き
気ハ小付しハ之かし悲しみて一冊事に身を保ん
為し我等乃ち(?)ても絶て得ず和に雲願を為し
衣服等も不自由なりしハ帰郷しかも為し甚迷ひ
其備を求めんと為来此延引する所にて余儀
御恩を忘んと有之候所々と嫁(?)しかれ共某到着
皆(?)ともかく我等にも宗教へ帰るへしと悟りし乳(?)

めり

其後の事ハとまた依て弘布人に篤く会釈
致しなは諸宗も崇拝せり其後ハ年々世の
めし大力成もん信ひの(?)ある
我等かくる異教に重ひなしに信奉してハ其本人に於て
婚(?)ハ思ひも寄ぬ事にて殊更りれ共其後の所し
まそしんを安んせし但親に思ふに古の人内心
好悪まして表に行ハし成飾りしとも其うちに是非
千秋(?)等の依頼に係りしれ偽りと為すへしまして
あとひの有りまれハ第一にゆかし其方の内情に日本人へ

畀賤なる乞食はすそゝし陸羅也能海の老孫なる
乃者も労る事しき者ありしと云けれて実に有あり
身の上を語りける事なれハ其の日本人の頃に糸
なきりに紀まれ候しそ旅修の國人甘ぶ浅以もく
見事を聞き気を天運に任せへきとそ決定しめ
もし此地に住て後えて彼等の利益として其の計
なんて今去れハ我まを慰まをうとふさに後引まして生存ず
食やしめおきを得て陸羅也の蔵術をとなりしあとて
利をはんとの作おもんも我る為のうれ

再度城中へ呼出さるゝ事

分十年三百 八月廿八日 再ひ来る伐 城中に呼ひれき其の
の生れ甘盛茶を菓子おや事なし種々の噺に其
合ひハ陸羅也の風俗世並のるまて我等のるまに
物しける條しなり甘國に俄羅斯まても此者のき
暴風に逢あひや日本まてハ分ちの東風の吹る者
まくしきるをもあらしと彼ハ云ひ給ふ [illegible]
有堂の性をふせと之あらしてこ時ま己て有しく
休見まて左有しとておなる有に使ふなんと出来る處き
危あるて陳寄ての似りつ含ゆまて其れの命 [illegible]
菜をひ而摘をと残ひ者やあ者も代るし 厨 [illegible]

蛮学ハ唯やし長其道の為にてこそ蛮夷の
書も読得さる有なり言ハ無用なりと云り
一人の古人縫匠(シタテヤ)を使ひ長くして衣服に云ふるまゝ其
道の前にて阿蘭陀服を製し世のえならぬもの有
有り日本の風なりとも阿蘭陀風なり甚好み成し
て仕立之候得ハ尋常にて未来衣服の事
難なる事なしと云しに阿蘭陀衣服に作られしとも
其道より贈り来たる事なれ共又一向きとも
難しと思ひて其衣服を拒むとも謂なれ共
伺しまて得たる外套をも仕立之候得共未だ

服より送りたるヘレフニコフといふ外套の如きに袖形有り
似ひて甚可しきと云しに其事に人となして家業の不拘
を着用あるに生ける唐人に売り其外套を出し其縫匠に
示す唐人是を流とし其縫製なるに日本服ことなれる唐人が
出して後ぞ行れり

又後数多をとるとて外套をと与えしに蘭来二人
の程より北地の其様の着にて日本にて「モンパ」と
名くるものにて其後外套の製を伝へ
たるにまて当時の其様にて流布と成りたり
但無地にして上着とも外套とも羅紗にて作る

このかく一品アルキセイ 称りて日本風に来
言をなさしめり
かくて来りし甘はいの蘭人出島数年の宿老あり又
我まさに魚の如く滞まへ来りて筆をとり書きつかく
天をも知りかの事成 堪へ思ひ後の世までもまれ
画しき云りのも忘りし思ひ寄りしとき入帰りけれ
来りまさに云伝来り海外の事成計らんとせしに
捨書ふしてかの書への伝来此言かくる事ふ
書ひくる聞き出しを世しがたき事成語せし
に張ることを議し伝来の書に好き事に計しける

以画しみさもて添て伝来の事をあとも出て以画し
好にて事成をとどまふ事しと我か甘はくる術し伝
まるも彼此のぬき慰藉の類も誠実ふるや否やと
称し思ひき
其後同年六月 我九月三日 まで是れの茶に出てまたあるき
香事の宜しきを案好する事にも時とくれもまし来館と
阿蘭の書籍蘭書を日本人の前にて既に己人の蓋簡
と阿蘭のし甘まる雑多の阿蘭文或成実ある事を書かする
とも又時に伽羅斯風の魚肉の煮汁或は蕨菜の美
みそ聞ケまきまそ油まて煮つる魚をおろせる蘭書生

其外調へて食事する時にて水鶏熊兎なと添食とす
日本人のことく鰈と海獺（トド）の肉とを好むことは時々有り
其外麦粉と魚肉とを製したる小き菓子（魚肉カマボコ 肉糕）を賞味
し又は其後換寧の麦を煮て出し或はあるは白湯にても
持後部にも同し卓上に列せる品之食后日々二度飲
料として熱き茶湯を用ひ出て適する時は湯を
二杯にも与ふ程にも時も嗽を出せし
掬ひ其の鼻なる大なる能ふ二杯にて世の者
またある者にて後に其の用ゆる
かくのことくして其の飲ける事は心を用ひ

此事ありしか此を妻に其傍なる法を繋し執事の隨る
ことなり
宴会に支度し給仕する者の如くなるに食物を點指する
こともあり其のうち日本人の醉のことくなる所にて亭主ある時
一人の妻に命て請ふにより亭主妻の妹なる座にて事を
弾き或は横笛の曲により樹木の梢まて聞えし心を
慰めたる者あり此等の事をもて故中に言れは彼者
いかにも気にも似し彼等と驚き彼之為に仍て是を與て
都人と云ふ者亭主好む所をしるしたるは好むとて去りぬ
南ことなるを以て宜しからぬ事を人々に語りければ彼等にて依る

常もり思ふ事ゆゑ其母の病なる人事成たり
るう答にかれ亦にて宜もと弁きかれ苦しきか金
まそ冒を報の悪あし人も悠る無しと仍うえし
まう亭も恥ゝ止しぬ比るの宿りて生乾きへしと
思ひおろうしにかく難わしも世のしけれ
同月廿日 九月二十日 正月の末まで不日毎に増して呼
出し為せ給る彼所にあうまし宮良の君も篤と身
思る事屡なり此月の廿日ゆかり宮の主嵜し
すゞて所まの落き病へ出て此筆彼のめし
我間の品織ふと借へある哉留所の下とき示すて

笑もおもう正事ぞ厳よに拘りけれど如し
極く御のかを問ひ正を弁すも笑ふに落筆にも稀
あく是出生しまと我身を抱くとも関ひいれ出
見まき存上の猶ましをも終くを折れ
出しし役より何し為年は残をも出へんより
去り居の小敷し所もんとこそ嫁も所々にと云にる
数あるなりき
極前ぞ独て雪を降しを第十月十四日 十九日の
あるこう世をまる申めり二只をも過ぎるとき出雪を
消うくり第十一月廿日中旬より十方雪ちまで

是より先き宇陪に参しかりき
或時予に問しは捕はるゝ時何ぞ不持しこそ猶ハ
或手やと予云櫃の錠数箇と測量の器ありしと
其の云其櫃の抽斗(ヒキダシ)よりて何をか出しけるや予其
之に示しけるにみな開ひ見ても幾何何の價
そあるやと予答て右品のみにて如僕の常する
あれ共予に示しけると又開ひ見如僕共幾人命有者共
何と修ひ録せし禁あるやと予彼に命しけるの
事にも言の事を聞て予を怖しのみならずき
家に僕及衣服の事を審ねして何の用あるやと

いわれて彼大に怒りて宰色して予に云ける只論
しき事を咎めんと聞きてける如何して事に及びしあり
此思ひとせしてすなのれとて甚予をいさめして
此より期の如く彼より和しきりけれは予も其言の不服
なる後謝しかしてまた又問とも顧しき事もなくんは猶
言のまゝ及ひ家僕も共に直る事を言ひとゝえて此を拒む
凡期の如くなるまで百まて云ふるとも予を止しまでも至るに歳
猶ほ盛ゆゑ和せり
正問の余る次第なく彼と言ひ是を聞て混雑し
近ソリリル伺ひて今後あらはるる事多く終るに甚事何哉

ほてなきを推考ふれハ、ものありて常に慎むへき事に候
さりきなく僅に二三百年の政事なるのみ
一 俄羅斯帝の衣服ハ何を以製するや
一 何を冠とするや
モール其冠の形を画きて示せり
一 シントペテルスブルクの邑にて人の好める衣服ありや
一 他邦の着せる衣服ハ俄羅斯にて縫裁のあるひ
ありや
一 王城にて大礮鉄砲を備ふるや
此等ハ欧羅巴の諸邦大礮を以て城の周に在るを

こハ是と云ひれハ日本人甚怪しく驚きぬ
一 何の毛を以羅紗を織るや
駱駝にてミカープ羚と云ふる獣あり是を云ふハ又牛子
モールに其図を写さしめ随て羊羅及馬並に
車檣等の図をも写さしめて モールも辞し難く
共しるし画きて之を示せり
一 俄羅斯人をして最も好める戯いかなる魚
を食ひするや
一 料理の仕方ハいかにも候や
一 俄羅斯の婦人をして好める衣服を着せしむるや

一 俄羅斯の乗馬ハ如何なるや

一 扈従供奉の者ハ何の官なるや

一 俄羅斯人ハ和蘭人を悪むなるや

一 シントペテルスブルクまてハ何の品を賣買するや

一 帝の宮殿の廣幅幾許ありや

此等ハ蘭書にも記しあれとも隠て其大略を吟味し責め

問ひ尋ぬれとも凡て秘事の時ハ語らす顔して言通

けり日本人の問ふハ彼の如き暴虐なるよし答へし

たとへハ俄羅斯の内ニ港ハ幾許ありや軍艦

若干ハ幾許なるやのことき我事を尋ぬべきなり

彼レ此等ニよりて靈を設けたるあり皆記者

ありて来りし紀行なれハ了度問ふ事を除て再ひ

問ひ彼の事の業を記録して逃さゝる様にすべき

なれハ是等の事也

一 我軍の海軍の備艦ハ幾許なるや

一 兵軍の職ニ就てより幾年を経しや

一 何の国ニて其位を得たるや

一 俄羅斯人ハ日本ニ幾度往来せるや

一 俄羅斯まて一艘ニ幾日の乗なるありや

一 俄羅斯人ハ何の病を患ふ者なるや

一 阿蘭陀の婦人は幾筆佳して頭て字成設け幾筆
ことより嗜まる事なきや
右の外阿蘭陀帝の名并王族止白里 イルコ
ーツカ オホーツカ 首領職務の名
写し給之
異人の間の固能弁識見あらしと思ひしは
弥あり指揮する兵卒の数之又 シントペテルスブル
クまて本営の兵卒を何と申すと尋ねしと
之 カセンネン 城郭に備へて兵卒成兵 大砲及二方郎の名なり の国と申すと答へ
クまでに又 モールに向ひし シントペテルスブルグ の國成

画き何と成申す識何と申成 カセン子ン と云成譯ニ示セ
と請ふに モール 潮しまで成る恩しーにかかれ又
兵卒を任みまるや何其の家にて事業成つと記
カセルネン の居城門戸備への数多の構多く
カセルネン の内識評の家国あるや其成何ひ給え
陸軍の兵卒成多く カセルネン の事を陳ひしに其
兵卒成の間にしもへ亭屋等を知りしと云て有るに
其とも絶て兵成間て止まり成あるに又如何任する
所に都の何方に在て其構之と云ふ事に識あるや
とて モール に乗りしと成圖して示りあらしと云ひ

並ニ香葉ヶ家族の廝婢僕の数までを聞かれき
并云如きの問を発して日本人の我等を悩まし
困んとて為るなりし斯のごとき問につきて答ん事
我等ニ於てハ呵責ニ余りニ堪かたき故ニ
赦免ある迄遁れんとする調をかえし赦免ありて
故ある答き事を云聞せんとて又斯も思はは彼を用
問を起し出所我等に答を継ぎて枝葉なき
返に答へ遂に其調に能て又問を起し其は
継ぎて答へたれ共遂に日本人の答ハモールの書の及
ある画の形なる不義なき様学の人と思ひてモールに

問ひ係る何事ニ及びても答ふるさいへしやとモール
思ひしゝ海軍の学識を学ひしと云りみすまう
種々の問を起さんと思ひ只伺先の外ニても答ふるへきれ
ニ答へても又其伺先の事に転し伺先を何処
ニ係し何を業としと伺ふて答へ遂にしやなと
問ふ尤も別ニ師を撰びて学ひしと答へれハ又其の
師の名を問ひ且其師ニも答ふる謝礼をとりて係るを
答へしやなと尋ねる彼又是ニ問ひ何事ニても学ひ
しやと問ひし故又係まても答へしやうと答へ
並テ答へしと思ひしる何の業何の事ニ及びして

教られし其文字を解しかぬる所ありし幾年を
経るや何の字を當てありしや何の学術にもせよ
其事を窮め通して其義を達せり
デイヤナより送り越せる我朝の示しを指出し其家の
名も用ひて其にいつもの示にて出し値を幾許
ある故問ひ試みるに其名を記し其家に附しおき
翌日其列の前にて猪尼利亜と拂良家の書を
入れしより我指出せし是をデイヤナより送りこし
たりと見えあれどもわかりまでと見を分かちき其書を採る
出し此を何なる記しかものの中と問ふ事なりし

其文字なれば彼の文字行ふ書は日本に所作ありし此書
籍数冊の内にて究理学上の諸説を集めしもあり
み窮理学に従きて未だ殊に種々もありて其に思を出せし者
もしありて其内に拂郎察にてレベスといへる
人の著せし所の容理三冊あり種々の器械の図を載
せ且学ぶ者にて甚だ喜び好事の廃止に稀く
其義理を知らんと欲し其較著なる條を挙げて
これを伝へ求むる志ありしも事ならず又アレキセイ如き
通詞にて其義理を解し得る者にも及ばず
詞を借りて其のこゝろを知らんとすれども彼頼みに請ひて止ま

されば予甞て国中にガラアン（梃にて重き物を揚おろしする器也）と滑車
あるを アレキセイに示し儀しければアレキセイ之を
解して由て器せり 彼徒て云は此の器を日本にても
常用の所にて 嘗て人に知る所なくとて出でけれ
能くは日蝕の圖を出して問ふて曰此圖を地上より
太陽の大距を測るにあらずやと予問ふければアレキセイ
其を解して悉く思ひ出しアレキセイに云はく依拠の
一端の所に付し所の蝕て之は見を知り中と
アレキセイ云ふ知れず 但其に何の理あるや知ると
予言に於て日蝕の理を説示しければアレキセイ

審にして了解せし様子にて自ら息の限りする
大笑して云ふ ま事に愚なる事なりし 諸人は
日蝕を蝕する事を得んと成而も此祠を祭て災除する
事能ふに日本人の言ふ所に寓して出る所にて
日本人もアレキセイも此の事の通りを知らぬ
ことも相違なしと見へて 彼是と務を了し寔に笑ふに
聞ゆ 此様の事のなのなるといふて止めぬ 但しは
の事と云ふ祠を捨て後にて祭を当ひてもらう 縦
また祭らんとあそばされたとて日本人の祭を惜むの
者と思ひつる様にて 特に彼の務めを尽し下に 予ら

名は記しあるは凡て諸学の所持する所は無し
新奇なるものなり彼の国の此方の事とは実に
此方の助となりて彼土中の図説も多し実に
和蘭の書は何れも思ひ付く事の心あらんと彼らにもしれ
たり
右の書籍は出来する時に関東にては此書籍の内異
邦の書多し阿蘭陀の出来は只一冊なり阿蘭陀
又その書は刊行せる事なきも亦其国に於ては
阿蘭陀出来は他邦の出来書籍数も多きとす阿蘭陀
刊行の書は此国にて数多あることは聞かず他邦の
書は皆好き紙を用ひたり阿蘭陀製の書は
紙もよからず粗悪なり其上いつれもなり
やと云事にて阿蘭陀勘校せることにもあらず然れは其
義粗にてあり他邦の書なれは粗悪なるもあり一概
に定めかたしといへり
種々の関する書にて其中に数もたゝぬ阿蘭陀の
武備海軍の多寡城堡蓄財の事に及ぶまで
系譜までも詳かにして国々の事を悉く知る又我
邦より四千五六百里の大海を隔てたる国の事まで
実と思はるゝ程なり系譜の名を聞くに燧石(ヒウチイシ)は

彼等ハ改メテ笑ヒツヽ彼等ニ出纏ヒ申候旅
不申候
我等ハ右ニ掛ル間モ数日之間中相成リ
笑嬉シテ笑ヒシトシフテ他ゟ一緒成リシ事
毎日我等ヲ呼出シテ種々ノ問ヒ成ル事ハ我等ニ
アツカル間モアルキ出シテ一ノ疑シト申トキハ
我等ノ宰ニ弁事ヲ云フ二人ノ男アリ是ハ
ホーシトフ クサハリン両山ニテ捕ヘ酋長ガ鄙
連逃セシ者ノ一人ニテ是等ニ伝ヘ我等ゟ
城ニ出ル時ニ加ヘ付添ヒ傍ニアシテ我等ゟ

調モト学ヒシリ或時是ハ當所ニホーシトフノ事ヲ
問ヒシ所彼云ホーシトフノ兵役ニ従ヒ居ル者トシ
予及モールノ兵ニ従ヒ居ル者マシテト聞シ形アリ
彼ハ調ニテ我等ヲ訳解シテ学ヒ居リ甘此時我等ニ
云ヘル事ハ彼等ニハ源七・福松トイフ者アリ是等ハ
彼ハ酋長鄙加ニテ在所ノ長官ノ家ニ用出
サレシ時甘ヒ長官彼等ヲ帰シテ頓テ下簾ノ宰ニ
当ト後ハ日本ヘ押寄ノヽモホーシトフノ為ニ年
好ミ事ナシニ日本ニ降ル者我ハ村役ノ役ニ捕フ
然シト云ヘリ彼ハ予等ニテ鄙採酋長鄙加ノ長官

たるとの勘のぬきと言もと云へき理なし 余事を徒して
作用もなく奈落にて首目捉将苦所の害人は彼罪に流し
ホーシトフラぬき 職形もと日息手紀にまのせ無法の
てよ阿なもしまて 織羅斯帝の許をし事に
あらせしと云ふる哉 彼等か勝ほりて 帰されくると
思えあらんと 弁悔に全てなし 濱には其
絹にて来りまて 業和の洞に揺しくり 玄年より
聞得して後世は云ふるとも是よりて整々の内にも
作あらと呼出は事あき 我身の上は或々にと候らへく
しみ継ほ同に於して 我等哉着願し 帯心

もまさ程に廟も無し み我等に命は只大もと称り
運をも待無し 若何事またも鉄る筆あらは悍
あし継ほ同に 詫もと無し 同位にて 成無き事は
叶へ得き故無しと也

遭厄日本紀事巻之四上畢

遭厄日本紀事巻之四下

目次

一 牢内新に爐を開し事并或人婦人の画を贈る事
一 我等か身の上の事を書面に認め出せし事
一 アレキセイ自分クリル人の偽りしを訴る事
一 我等呼出されて縄を免さるゝ事

遭厄日本紀事巻之四下

杉田豫
青地盈　譯
高橋景保校

牢内新に窓戸開し事並或人婦人の
出役願ふ事

第十月中旬秋九月中旬に至り寒冽にして窒を悩しける
冬至りは是よりも上へ行けるも縁也の気候并無甚度
まても遠き鋳き寺人居所に風の吹入れけるも
牢外の格子戸に至りて除けらるゝ事能て尚来ら

段々に図て一の穴をあけ麻縄をつけ開闔を
なし置くなり此穴より少し天気じと樹子なと
見る図櫓の穴まで上までも少しも高を極め
りまた穿の本にて根子なり二三寸程り離れ出窓に大なる
穴を穿ち其傍ら四角に切る所まで囲ひに
うち付けおきて船又炭火を入置き其外筆に
て穿つところの腰めぐり

此地燈を穿んとせる場所を役人通りに置さん
工匠等と評議熟按せる事稍取計らふ
予初めより何事より大なる事を企る故人の患ひま

左ればこそ何やらん一事彼等が思ふ所に穿窟
なりたる事のよしを察せられて穿内にて手を
伸して燈の火にて確かめなどして見たりき
烟穿にてハ燈火にて穴を熟考する事の自由なる
様子も穴を塞ぎてんとそ少し工夫をなさしめ之より
是等人々かゝる疑惑のあるもの時節を考へし評議せしに
しかれハ家来等身の上の事を評決せんまで幾体の
時を経きぬると予も之を確かめしむるにそ許さるゝなりし
其後二三日過ぎて家来に烟穿と烟穿を賜り其元へ
上烟穿ハ出しして中央に本にて作れる象嵌を附けり

其残りまして牢の格子の喰を出せれは蓋し其血を
牢内に入らしめさせん為なりとしても日本人の
信心深くしてかゝる筆舌に尽し難き
不便なりけれは彼等に難しして日本人ハ強而也の
者と今に依まじと思ひてかゝりし事をなせしかと云
それハ彼等其事を知らずして若しなるハ日本の国法にて国人に
自他の害を恐れて絶て何なりとも一言も言はず
然もそれ況や国王すら嘆せしむる故や况これの
礼ふる者思ひて牢に入れ悔を開き正法をも破さん為
かくのごとき国王を甚く憫み之を許せしなれは勝るなり

存けれとも其兵を出して仰とけ除ひぬ如何なる事なり
かくの如きの事情にて日本人も絶て法を守るなれは
事なとりてもその時宜に従ふなりとも有と見ゆ則ち
因て思ふに彼等も仏蘭西と其の義を起しと思はる為に
其国法の如何なる故も寛大にしても事をも寛
宥し其志ある強敵と自国へ抗する者も敬ひて
あらそへるものゝ如きハ彼等と告けるハ仮令何の如く
如何なる扱ひなりとて既に免されて帰国
せるにも至らし但し日本人の為にて何なりとも
速に謝されん一事を述べてハ其事に係る

抜萃ハ出しく雷風考識し浚梅亭き振子ハ此斤
儀定せし上にて事ハ論せらるゝと此ハ老なる小
凡日本人の承知ハ不取ハ振子ハ實に落ぬ此ありしと
後よ見ひ合せたり
奉行承知なる且ハ諸し易き振ハ新奇の書をの外しひ
ありなる手よ或る書ハどうとて了へ書あり亞那の
船の阿條羅斯の銀銭第二世カタリナ帝の像ハ
鑄てゐるの日本の米俵正一号二ヒエツト（按凡銀十メ目よある）
ともあんと見ゆるの菲をよ奇麗なる金よ彫鑄
鏤めて入ゐるとの仏し甘い美の金ハ漆塗（按ずるに金をいむ絵なりん）

ふきし美なる所にて奉行の秘蔵のよし右の銭
我等よ二両し此所に珍珠色にて見し事なりや銀珠ハ
何と名つけ其價ハ幾許米俵ハ俵羅引の量目にて
幾許なりやと尋ねり此方の四五例の按針よ答ふる
事もなし只て連れの言にて止ぬ彼の美よ入ある
珊瑚鏤めより好き酒煙草などを出して承知する
よ無きより甚は先て云是ハ奉行の命にて
何よも思ひ様ハ不成り他国法にて奉行承りて
食物を禁ずるの外ハまた故よかくなしたるを見れハ
奉行の保ハ懐むるの厚き事ハ言ふまてもなし

みだりに家来成者廻る臣もあり若し家来なし
ますとも主従の礼は其臣日に二三度も来りし
上使の臣とも使ひ来りて珍しき文武を市中に
失火ありて甚だ騒動せし折からも所々市中に
家来を遣はし来りて火消ある段告げ知らしむ
あれとて下宮に往復せしに家来もしめて
松本の主来りし日も先ず出ありし是市中に来り候ふ
人をも遣はして心を痛めたりき
此失火は海濱の船小屋にてありしと見て失火の
時より市中にて鐘を撞き太鼓を打てり

なりと定めし事あり毎日稽古の食膳を異にする
主従の前にありしが此に教授せしめて稽古成
庭の名にし給ひて本来に通ふなりと云ふ或
日翁日本の婦人の美麗なる衣服を着したる者成
折々来りて来せり尋ねしに理はいかなりと尋ねしに答へ候
りて翁に逢ひしかば翁此成る者なりと云ふ事辞し
逃さんとせしかども其の父なれば何の為か来れと問ひける
時に真をと見えて心を痛めしと云ふ事にて家来の身の上にて
かかる物を好むと思へる也政治色々に於て婦人を美ふ
在りけるよと云ひしと翁我が婦人なりとも取らん

此艶にてするとて投ぬれり 此に亭主此を能くはからひに
送れりしに此モール 彼ちる越しをて此書は家来に望を
送りける能々されは 家来にまして蓋なし 望むしるに
我年を経たる人と云ハ 活たるもの飲れ一のし
生けるを許しはん中と云ハれは能にそ穿て
否と手事なれハ 首尾よ得しと云り
我身の上を書面に縷り出さし事
第十月の末（九月末）より家来の身の死去を書きとしも
盃として紙墨を送りに能くはせ給ふ 其の体裁を示せ
り 彼の望ものにしも参ら事も多くなりも

数ちなき 彼云けるよう亭主とモール及ヘレフニコフ出
各別成に出なし 永年まて成るにしても
めし出しまして来めし 生国父母の姓名
仕官をもしようの年数を記もへし 此中の事も
家来にそ望むなし書しらん 彼の種々の言もかなき事を
出来るまと云へ 自とつい係言さらに 人の於きには
第の葬地に葬られて基地をも定めたるの
ことき 彼の崇てなみに関し事とても亭主云
かくのことき事を書くとも記らんも
生にも我手に於して右の上の事を書きたらと

あらしむるとてうけかゝはらしむるは彼邦傍く
出しめんとて其国の道を出たしめんとて保来
くるまても上へうかゝ得しと云ふれども此中しの
事まで承るを拒みて兼ぬられは殊に傍来り ミシント
ペテルスブルグにも出て云ひし此海の事まで委しく
出し此所其のあまゝて略して義もなし但百年へ子
傍するまて地面の事を云ふとも出来る事をしと
云ひて予廿年前に議して其より委細を出すに至
此国し写後言ともアレキセイとして是
出版の道は既に成して事しも分しと云ふれは猶此は其

出版の剏営を蔵しありて出版しとて行はれ
去れり
先年我国にて出版の様を記さんとせしに看る
年をへて取らんとする際忘れて寫稿を得して出せる
出しやしと思ひ出すまでを得たり ヘレフニコフ と云
人も字の様子の傍にて木版彼の看るまでの
方より出て来られたる墨汁をは小き本紙に印するの
其後その版を事として其移を出せり

日本人は飲食の事に関係も用ゐ候品二つ
の品を用ひて其実汁をは甚悪しく

欧羅巴人の筆濶を嘆ずるあしまたクリル
人未嘗て象牙に小き木筆を作りあり
ぬるを以て墨汁に用ひしかり又某人が
書きたるに鷲の羽を用ひて毫筆を以て用ゆ
る字籍に字を移すを以て世に秀じたる字を以てふとく
能書きれハ世もよろしく習ひ学ぶのみなりき茎の高ん
を換るとて鵞の羽を以て代へしなり
其后蘭人の言にてヘレブニコフと仮名をつけて振りたり
其邦ハ予ヘレフニコフの傍に引き出して其の問ひとて其の
気をもちて鵞に筆を以てようて紙と送りて其の帝の

料に備へあるとして移すと作る事なれハ其の
用ふるの能ハず鼻異にとて其えし廉を
用ひたり
本書を予が移して読み語りたるはモートル碑を
其の上に居ましたり此の帝にアレキセイをして其の
通商をしむる事なれハ勉て節言を以て
アレキセイに言はし安き事をもしてまた
其の國の人の偉甚しき筆振るしされとも当アレ
キセイに解し難きるの多くして其の上に才を
分思ふ意を以て皆ちりアレキセイ互りて其の事を晓り

乃て彼方クリル国にて傳ふよし云ふとなり
魯西亜よ輝をしるしも本名宛具あり
さりき
魯西亜の民は其国の俗を用ひ我等に語りし
其字を諳ば日本の字よりも其俗に出せり
魯西亜は元此魯西亜の王年號五千年をしるし之人性
皆にして未しも 欧羅巴の三諸の首邦を羅へり
常に其国の王と後をもアレキセイを嫁
として其子孫を用ひ種々の名を称して附く
に程を云ふもしるしなり彼等の式を云ふ事を解す

毎にオヽツウ○オヽツウと云ふ其国は日本にて
其程を今は云ふにて云ふを之を以て西にて其譲
論せるも毎に其所を伝へ彼ら西方の云ふ
せられて西方の論せるは其の事して懐に程云
やしむる事も其に在て家来に至り須臾に程る国
後日以て見るも多くの事を彼に何の道をも有り
笑つて国に触る事なく之と云ふ如く書て
イムヘラトリスコイ 保護に帝王と云ふ者 と云ふ時は彼は論せしとて
二日後貫しより先種々の名を伝へてアレキセイに
伝へアレキセイ其を云ふ事にて彼国にて通し

易き様に云ひ習のせまま彼是を破ること九丁字ある事なけ
して云はるる時は遊興にして オヽソウ と言ふ人一時
語る事なく云はしめて似せて スコイスコイ と云ふ者
何の義なる事を解せざると云ふて其の詞の首尾の
変化させて其語を離して偏りてそれを解しける
たるなるべしと見る九日の本詞はそれ此後に統尾の
ことにて変化させると見えて又熊作らずにて嘗て
家学の詞は全く能く尽すべき事を思ひ出しに比
限るべからず解せざる中にて考へて大いに驚くべき
くるとなり彼又儀式日本語にて補ふなり

直偉せる様に連綿せる事もなるを否しと思ひて非ず
是なる文字を書き改めん事を補へて本せるには
絶えてなし如き事なりと云ふれば此者無く後にある
語ると釋して前に置きて明らかに着る人和歌の名を
書きと無くれば絶えて詞の位置を更にして書く
庵しと云ふて彼いふも此るに御と云ひてなれば
難得の筆備もなく本彼に向ひ倭俄に クリル
詞と日本詞と同じ居るに係りて其も無きの書
解せざる庵しと云ふれば彼等にて クリル 詞を実に
野鄙にて文章もなし儀式斯語まてにて意のしるの

出精に取れハ其事の成しける事を希ひ喜ひしと
露西亜人共ハ云へる事に定まりしハ彼も同し
く実なりと云ふ彼に偽り居る者の出るとも云はれ
引て此所にて振るまひして一般ならすと云ふ義を
論して後日本語に僞居りとハ相成して後年に
置しを唐らしける義を分るなりと云ふ者彼に激しくに
會得もなし折るとなりき
熊次郎露西亜人の出前の語に至る義を以て解しいふ義を
日本語の書取して又我等に通辞に読しむ
其内よりの遠いて事あるてハ是に後しの激しまて

其翻譯成れり
第十月の中旬（九月中旬）まて我の出前の事も畢りて我等
我等より願ふ事を添て奉行へ出せしハ松前の
罷る事を我等身の國獄を免されて本國
に帰き度き事を願ふてそ唐を通辞の願を重ひ
てたる且ハ亦アレキセイの通辞にて熊次郎に
和解セしめたり隠て此る旅りて奉行より我
等の出前を出帆の時に関わし其に和解せる趣をも
實訳セん為にて此に出前しと告られり
アレキセイ自らクリル人の傳言を語る事

我等か方の士官ニ掛置居る者共熊次郎附添居
候アレキセイの儀彼も致し置とも此度ニて挨拶ニ
アレキセイ義も日本人へと申入合て承知候ハゞ
あらんと返答ニ云合せて成行アレキセイ之初
さる事無調ニて事もと仕合しにアレキセイ是成
後れるや承知之事ニ致して云んとするに公儀之御沙汰にて事
と隠さるゝ者賊之様ニなれ共も公儀ニとあらし
魯西亜方にて申も罷あらねハ何もと其まゝあらんと
又是にて云事ハ郷ニ日本人エトロフ島ニて事をと申
クリル人数人をと捕へ人ハクナシリ島へ将て行き申さるゝハ

使者ハ魯西亜人を以て命を守りてエトロフニ守兵
る者を召捕しとクリル人等を誘ひ出し其
乃ち日本人捕囚して此度頼みあとし乗
其この人しして愈ニ成りと云ハゞ喜ひ致免し猶ニ
其後しあと云しクリル人に詫言成し喜成
逃れんと思ひ使として魯西亜人等を来て守りて
来りしと云しに其事彼クリル人の云しに
全く偽りなしと日本人にも云ひ明し其自ら喜る
かく頼みるとも厳しく是成以て事も公等
の如く魯西亜人ニ常に住居成難き天の照覧ニ

僧ふ為し魚とへ帝位てやうより始十年二千年活
あのびくんも詳なるし立後せし浮まさらんとて帰し
又れ擬て取しまて此事を公年ら書為をあかへする
為しと云り甘須常まりもとしく解し実ふ思ひ入
魚ち振子のなり亭甘云ふ両の処感常しして云んるまて
條ちのあめしあしまて條の庭邪あるを偽るとも罰まるへき
ても殊し上條ら同條の之要の云しるまて罰を被
あふあり促なとありて日本人ふ條り民を云はとも皆
我字より條ふ旅してクリル人ら向様と相消の二を
思ふ為りある此之よく而考して條首を飲て斗ふ振もらん

今球勿ふ條ふまきを從ひてまて日本人をより買て云んは
アレキセイ是をクリル人の條と爲するの伊本を我ふ
船帝ふ来し時ら為き国と申し時ま子生まして
為しとなりて甘らの代此方をやとも法しいは是ま家児と為
しとアレキセイ是を條して施考せし振るまて云
又るまて日本人ら帝の言を信用まるも信用せらるも
まかまて掬しは帝を臣まを氣して諸言を取らせ
あり魚と人日本人帝を甚親せとも死して継を
取りは帝ら本をなしとて彼ふ底受せしさいる
於て秀本も取らいアレキセイら嵜族の考ふあるさる

扨まして此事を日本人に偽しくしと云事せしか
指図ありて言ひ含めも有りしき
或時先ヅ無理なる彼クリル人の白状せし事ハ全く
偽之とアレキセイか云出せし所を先ツ無理ハ
節ハきこてアレキセイハ短気にて立腹して叫んと云ふ事以て
アレキセイ短気せしが心も飛きて其儀実を詫びんと思へる
為に死も極めて覚悟せるなりとかくして無理なるハ出
去るなり此の後彼か者に甚じせしや否や知らし
然とも来る者なる城に出し時其の役人来るに由無
承服せしを見て戒められしにアレキセイ自ら彼と偽の
事共迄てクリル人ともに白状せしは全く偽にて
有りしを甚考あはせし此の要に云出されハ説人全く
発き云ふ彼自ら己偽を詫び出されハ大なる痴漢（ヲロケ）なりと
云ししに日本人も承知アレキセイに命して云せし
と思ひしなるらん
此より後アレキセイか座敷に呼出しける時薬彼か
心の変じて舞ひ出し如彼の悪しきを申と思ふとも
なし思ひけれハ彼か扨ての何となく悔しと思ひえんすり
弟子共悩まして居るなるを許しあれハ出して序てに梅宝を
道遥し窮まれ水まで煮かしてアレキセイなどを織くこ

其事御聞しめ若しアレキセイが善と無りて你
親をも為に成しかし若又其子好かりしと思ひて悪止成
為しなるを従て予これ善悪ば宮家に為りしと為し
余而は生来まるに及ふて人の夫よりも重き感冒を患しめし
我の為に教をなれる予其事のよきを知りて悦ひし
其後彼の夫と幸なりして窮に及ばせる事なりしか
しるに彼より云ふ事をアレキセイ生きて残りて彼より
我まに云ひし日本人に對して云ることもまた筆なして
我まより問ふことも日本人に為せしあり人と思ふて
我より猶起ともに予思ふにアレキセイが信を飾る事

有し給ふ予実なる云ふしてより正に筆成ありせし
なりん
日本人アレキセイを見聞せし後我ま成職ある
寄与し事もが問なるを儀羅斯人筆にクリル人成
日本の所地に成（本ノ六）りしかしなるを有りきやアレキセイが
クリル人まの白状せし事を信ずると云ふなる成
為に伝ふに告ぐる中を従て我筆　若しアレ
キセイが其云ふ成解せしして来りし日本人に云ひ後く
為しと成もせざりしが日本人まで語るなる
知ひ自ら何事も候ひ合しか其間に我まより解きる

とも能く彼日本人の言葉まで承知にアレキセイと
承りしかせやクリル人の為幸せし領を出海まで残して
まで傳り錦れるを思える程を成就せりアレキセイ出
當時言成様々は品目解して彼クリル人と對談
せん事成難くつり彼クリル人来まで常日本有り
傳めありやみ已に放ち返せしやハ尋ねて我等に知ら
せさしきせうは我等窒の合せよ此事を聞しよ
融名知りまと云ひ彼ハ已に放ち返せしと云ひ彼ハ
當爲まて思ひてりと云て定めなり実に日本人を
アレキセイか許えし事を虚説として我等か

謀と思ひて我等を皆せん詐欺の者と思ふの外なから
らん唯天のミ知る事成我等の我等の
婦とならぬ斯のみ終身囚獄せられて淘汰の望
し事なしいかばかりの人々の者速に死せんこれ
速に帰らん人と思ふのみ只我等か究竟せし成
日本人を放せしや我等成置んとて後猶食物成
とくし我等の夜病成ても一時に涙の衣
を待ちけり

我等牢獄を免されし事

第十二月十九日 或十月十六日 城に出て両度しと先ず寸多く我等

後世の者并に通事も甚た迂遠ありて此なる事なり
より一の好き事を示されなん胸に唐しと云ふ何ぞ
あらやと思ひ蛮語に出しに我等を大略に存すき故
家列留し其所彦に習て承知する所の事を聞ひ
其外承知を尽ては毎に西洋の人承知の趣を
聞ひ并に同僚互に和蘭語や食物ハ言ひしき
や此の大学ハあきやかと言えり
次に聞かる作等ホーミトフの事に就て説き明めし
條々解去年迄なる事作為る日本海浜に寄する者の密議
あるの事などふしきる事実ともなしやと尋ねに

此事とも彼翁もし不思かすりもと理会を説き
しらアレキセイ例の如し正大なる通に聞せし此
趣ハ初作事え日本の村落を乱暴殺害せるホーミト
フらあき者なりと思ひしかへ陣屋におひきて虚に
おし彼所にて日本に敵対する所謂の乱閉せんと
たし之其昔より古ろふまて日本より陳所に
対して彼を咎むし事なきら古之能くふ作すら
無事を承り好きしては今く作所の客あるの関る事に
渉りして作ふに恐るき事を知らす此に依て今より守
会を免し于に好き承知に移りしめ退て善なく本邦に

政を治る人なきに付ひたんとなり(?) 去る年より(?) 於て
始て称る将軍と申もの 此国の主となり 上は皇帝(?)と
執政ありて 其命令を受て 事を行ふ者なり 保按ずるに(?)
只将軍と申ものの命を受て 下々まで(?)の輩のみ 又是は(?)
実は将軍と申者 将軍の主にて 裁判を 親(?)かり
きしと思ひしは誤りなり 西国の(?) 帰国の前年(?)ひ
せんとありし [illegible]にて したる事なるべしとの言なるん
是より先は 上 皇帝と名のりし 事は 何の言にて 我が国の命によりて(?)
免じ 能々 あるまじく 者ども 軍事を 家業とする者は 使節
を 帰国せしめんと 持して 一人の 役人 江戸に至り
其事を 奏上せし 使節の 理を 説く ために 天の 行(?)
り 是年 政府の 旅事を 待居しとぞ

日本人の称する所の者を 天子と称するは 我
が国にて 尊ぶべき 事之 我が国(?)の如し 天の君（本ノママ）
を以て 本国に於ては 此の者を 日本人は
若しも 我が国人 此の事を 記して 天子の尊き
を 人に知らせんと 思ひ 楽しみけり

アレキセイ 右の通り 申して 我等(?)は 理合(?)
由を 申すに 通りしかれ共 人 [illegible] 其子 我等 縄を
とき 免して 我等に 渡すを 願ひ 此に 世話する 鈴木甚内
上京(?) 無役(?)の 者 人 [illegible] 所に 渡る 者 ありて
家来 [illegible] 此 [illegible] の 為 [illegible]

別ニ残せて飲ミ残ヲ出せり　牢舍ニ帰りてれハ
看守絵付との第ニ夜ニ入来り去年皆秘事ニ
向ひさんことを出せり

遭厄日本紀事巻之四畢

遭厄日本紀事巻之五上

目次

一 牢内の様子委く了段述る事
一 村上貞助ニ初て俄羅斯語を学ハしむる事

巻之下

目次

一 奉行より新しき衣服を贈らるる事
一 我等る書籍と剃刀と残無する事 并 出奔創意の事
一 出奔の密議并モール変心の事

一 閣官私家に招て説話を為せし事
一 松前城下逍遥を許せし事

遭厄日本紀事巻之五上

杉田豫
青地盈 譯
高橋景保 校

牢内の様子去つて改正ありし事

我等城中より帰り見るに牢舎の有様は全く
今までとは異なりたり日本人のかく暫時に改めし
事に驚けり先我等か牢とせし板室を取除きて
前なる板敷の間とて留まらし板をも取りて清らかにし其
上に美なる茣蓙（ござ）を敷けり此に由て我等か住居はなかなか

客来りし時ハ客と共に我等其所に出迎ひし
に爐の側にて小さき卓子に我等ハ茶碗を載せ
銅鑵に茶湯を入て煙草を掛置火に煙管と
烟草とを入れ烟囊を設けあり煙ハ魚油を用
ひしに蠟燭を點し其類の数多く我等ハ西方に
出さるる事にて大に敬する事也

日本人ハ貴賤の差別なく朝より晩まで
煙草を好み朝ハ男女共に其煙を喫み
煙草を喫し殊に茶を好み茶碗を出さずより
出さるる事なく常に茶湯を沸して是を

喫し候茶湯なけれハ温湯を喫して而て
冷水を用ひ酒も温め飲み冷飲を好
まず是を佳とするなり

我等江府旅行の節ハ至る所に都合宜き居宅に或
役人名刺を持て来り我等を賀して爐の側に坐
し香を観し談話して烟草を喫し我等ハ三
本出す客より候まてハ何れ賓客とともに待
たる席にして客より会釈を掛くる事にしてはなし其所
まて卓子なのも磁器椀鉢なとも外の美事に
て其器の様も大きなるに候得は是まてハ盆の数を

限りしなきを悟りて飯し絶てより久しく思ひをは
兵役の事ありたるまでは本国に帰る事を望
み続けりしか是より後に帰国の願も叶ふ事なしと覚
え常なりし故嫉しくして此事を聞と直ちに嘆き
始て諦めり
正しく此者の国を本国に帰る願もなくして楽しみ
なかりしか此業も長のことして上手に特別なる事
知りて我等に説きし事も信し難し有る事を以
くもし事も篤き恵の故に之を生し存分に家
するより者をも好しして彼か利の為にせんとせる事なる

へ彼等指の徒假面を被りて人を欺とも予に於
て其悪假なる事を知り其家は素より食
物數多有りて又舊時のあしき悪しきなり唯膳椀の
器等を持来る役用は猿猴も亦無事にして我
等を縛りて縄にて之を吊し亦た掛置て此等
皆自ら人の素直なる事を示すなり上間シクナシリ
にて島等は捕へて有るも舊く番に乗ても手間取ともて
る彼人等は松前の手にして奉行の前にて又アレキセイ
を召出し外閣せりと此事にて是迄も其筋も
ありし我等が事情を会得して宥し免さるへしと候

聞せしにあらはれざりしアレキセイ時に至り
来りて帝に告げ候は今かゝる事柄の出るに至りしに
総て口供せし事共類ひ拷問せられしと語りけれ
ば帝怖れてとらへし前のことく其人を訊問なし
罪なき事を是に依りしと悔ゆれども遂に死しける
拷問せしにより此たびの拷問に依りて死せし由
出さんとて逃出せしと云へり

村上貞助に就て俄羅斯語を学びし者

事

武田熊次郎二十五歳許なる壮年村上貞助と云
つる者後僕は来りて我国に云へる事を知り此者に
俄羅斯語を教へられん事を求むれども日本の
法にて海外の書籍を学ぶ人まで和解出来ると
帝又熊次郎に問ひけるは我国の口供を信実にして
万様と答へし追ては免じ通じつき事を辯理
あらんと語りし事は如何にもなるやと彼等にて
奉行は其事を高是非をも他人の書籍を
人の通事に和解せしめんと亦もや語りしと帝此段
聞て甚く悦びしに思ひ其は我等が免じ通さん
と云ひ語りしてもし此先あらき俄羅斯学の師と

さる工夫なく我等法をのべて日本伝兵衛を教諭
せんとすれば速に死せんこそ潔よしと自誓しければ
然らば刑を受けて死ぬべしと決して伝兵衛を禁ぜらる
故に此伝兵衛する日本の國法を知るべき為め也と思
つる事を命じて強て帝とモール（ヘレフニコフ）と
する人ひて強て来書ありて此者を召捕へ書ケ
引りて伝兵衛を免許なる事免さるる事見える為にこれ
り
甚後アレキセイ来りて城に居出されて遁りけれども
なるは右事の外に何事しやと問ける所なかりし

事ともなりとの差へ依て予思ふに彼等が心至
りてみぬとありて郷国の告也と悔ともやむしおもと教ひ
ても其心をと痛めへり
我等が新通事貞助に俄羅斯語を教へん事を許
しけるは彼一様の書を出し此は以前日本人の俄羅
斯国にありて書集めたる俄羅斯の辞書なり是を
もて事を書集めたることのあらしとあへり又貞助東江
然らば三人共に来りて然て日々にけるを共に伝ふる
に貞助に俄羅斯語を教ふるに俄羅斯の国政
並に其他欧羅巴の国法の大略を書著して東江ま

迄ニ至て尚更繁務ニ堪へかたし然れとも此事ハ容易
ニ日本人ニ示しかたく我等か身の上ニ拘るの事なれは
魯西亜斯國の為ニも悪しからんニ根の学へ成さんは
例の如く種々の問答起らん事成忍れ那りて参らせハ
生来海上ニの日本を送るとのあかれハ魯西亜國政の
事ハ紛らはしく第一其已ハ志らしき條あら紛らはしき事
ある事も示さ申しと云了
日本人の為ニ收め置候而書写の内諸
尼利亜國のトウケ欽人の著せ候書本ニ係
羅斯の國政の事及彼等か学ひんと致せる

事ともを書載せし然とも郷学ニ其書を成し彼
ら聞し時ニ手訳ニ学へ来りなハ日本人の未
と知らさる事こそ幸なる学ひ者は
験早きを宜しと以て先け出来る正解をも示
共無しと書かれたらん
貞助ニ係り魯西亜語を教ふるに彼才ありて記憶
ともより習ひ甚た能く今回して長ける者格耳係
羅斯語ニ与かりしに彼ハ已ニ俄羅斯語を学ひ
る与我ハ彼の欧羅巴の語ニても学へるものならんと
思ひて貞助ニ又然らハ即ち俄羅斯語を書する書冊

を秘あまして示して了解して俄羅斯語をもて呼ぶる
ものの音成二と傳ふるせり
毎日自身御用ありて部屋に来り夜に入るまで居るなりし日本手
紙の時体をもつてまでしき時は手紙も
字のにて我々に示して言せり

日本人の我々をも置きし所は常の罪人をも入
る事とは違ひて名付けて置所（おきしよ）と云罪人
をのみ入るる所をは口ウと唱しとなり日本人の
設を写しに口ウまでは也を覚事成件
さは茶に烟草の茶酒なども持出で言へ置

も無くして只紙の上にのみ是を書き我
等も書き居る所には烟草の茶成詩し咄するに度
以て酒をも出せし我々置所とは軍卒を置
く所にして人とは思ひしに逢ふて要々一日本
人の死ある者もあらしとまで出入
き者の家にて事成気色
彼俄羅斯語をも覚えて事達者にて不日に俄羅斯
文字を覚えて書き始めて其云れも頼をも直ちに俄羅斯文
字にて書記をも度根にて書写して書きたるを写して
書き事あり文我等より無数千言を毎に頼むに

是等の事にて書し其義理解に任して此文化
の頃也と聞ゆ
かゝる事にて紙墨も無くなりけるを日々手習を餘多
書集めて置けり僅に解釋を施して所々若し
此後日本人にて万一事あらん時には取りかゝらんと
思ふの志を出されしなり
然るに其後貞節を守らずとて十四年迄修の少年成
将て来りて孝經の講なり此の年までも仮名論語
大學中庸なとを云ひけれは学問にて修の書きを讀みならひき
人なり我書を正しく讀み能く筆蹟を見ゆ己に総て

云へるあし日本にて学問をなさんとするは早く和書
を読むへし扨て後日本人の我家の儀を忠孝の
篤かりしも皆それに依りて儒佛の言を和
らけたる所に一人通じ事あれとも漢籍を文の和
解に無せんとて又一人新通事成出しく文
其上に此少年までも出入しに然れは道の行は
五箇の学の筋を建てんとする然道とも我徒人数
少なし書籍もなけれは人ゝ古来成学の師とは
思はれとも今迄にも云ふけるも貞節志る讀れるをも
免まて忽ちに研究し云へる日本人傳ふる對

して見えさるなし　但此宝珠を得ても猶渇

さる事侍らん中と師も是を悦びて憤りあへるのみ

若しからは凡そ全世界に優婆崛多の外我ほとと

強て事ともなさしむる者あらんや我も事は安富

あるは魔王も威力をもつて屈服せしむる事を

あるは魔王のしわさ互に思ひ争ひ殺すに負たるは無念

今そなれるなり

されは争ひはれまた為なるは我守るに好めのみ事

の生まれ恩しと思ひしに何の子細もなく一念起て

負たる事形に来りて甚さ涙を集めに旅舞しける

不敵の罪を謝し以後のことし総ての守をなさん

事を請ひしかは尊者も此時の不思議なるを讃し

速に秘蹟の思ひをあらはし此時は彼か若をなしと云し

者をは只月待の念のみにして将て来りしか二三

日ありて負師尊に云れけるは是より室へは甚だの方

に来る者まて猶ほ過事にあらさんと知る者なり

若し彼をも見知りしは室に幸あらしと此頃ある

了宮達過ありしかは師も亦丁寧に答へて日本

人と依頼人と互に和睦して永しき國となりしは

此時は此出国の形しは数人あらしと優婆

斯國へ往ひ行て俄羅斯にてハさてあるき其他の藝術
をも教へし猶とも日本と俄羅斯との間和睦
ありし故ふ彼をも教ふも無言の事ありしと云
なれハ此頃ハ自分も此事ハ已に出来けり
縱令甘んの我か身の安全なやし事ハ実なるや否
ハ説あれとも日本政府に於て我邦の詞を使用
せるにハ思ひもよらぬ此事を前に言ふ翻譯して出
せ給デイヤナ 名船 といふ送りたる書簡を我て日本人
の頼みしか此書を翻譯の事を速になさきや否を知らんと
のことを見えんて我時官吏へ来りて大なる我を爲

に拵り置一分ニ彼書簡ニあてし詞を我字韻の
順次に輯録し載するに名及デイヤナの役人の名まで
隣りて書き添へ尓して此我邦の一分ニ記せる
詞を諳厄利亜語拂郎察語及和蘭語に譯して
白紙の面ニ書き分け出來し此我國をも王都より
送りたるものにて誰人にても我か知られしに和
蘭語を知れる日本人の出てこそすなれとも
いふ 保按ニ馬場佐十郎ニて 出来るものなし 僕間ニ亭ムと見ん
て我俸言なる事ゆゑし亭も亦傳へて云此等
の精ハ何れの語なしや亭も解し得さる詞徒て

見へ候由にて去し俄羅斯語に通ずる人なきも綴
り得てさるハ全く俄羅斯語を知りたる者の出せる
ものならん我等此れを讀んとせバ譯し得る所は其
書中或ハ乙（俄羅斯のスの字）を巳（エの字）にかへれ（への字）を无（カの字）
に書したる等何とも見へけり

尓後貞助并に告て云和蘭人のニコラスマン
と云者ありて好き様を得て江戸に住居
し生涯自國せざる約束にて天文地圖
等の事を勤む（佐野にて馬場佐十郎のことなるべし）彼か云ハ其
者の書記したる事もありしと

事又彼官吏に云けるハ我等此俄羅斯語を他邦の
語と交て記しなバ和蘭通事共是を見て已ら
意にまかせ和解せしゆへ誤る時ハ我等か云ハ正直なるも
違ひ易し其上和蘭人ハ元より俄羅斯
人中とハ甚だ好まず候せハなし甚しきは往時ヒサノフか
日本に使せし時和蘭人中に立て大に自國の利
を謀りしと云事有ればなり且此書面も一綴りの
全文なれバ其義も明白に読まる様にと思ひしに斯の
如き草稿なれハ解しかたからんと彼官吏其説
聞て和蘭人か日本人とヒサノフとの間に入りたる

とハ如何なる事にやと問へり予云嘗て諳厄利
亜國人の和蘭の海船より奪取れる書簡あり其
面に和蘭人の記せる所にてレサノフ日本に到りし
時其地に於ける和蘭人中にて日本人へ教へ俄
羅斯人の専ら日本に入来るの障を施しむる
旅に取成して大なる幸を得たりしと云る書を載
せり

予此時リコルトと云るデイヤナ舩の事ありて
諳厄利亜國の玻尓都摸胡多（ホルツモウト）（港の名諳厄利亜国物斯多恩
斯の部に属せる港なり）に於て此國の官人へブセイレと

いへる人に逢ひて其時リコルト船とレサノフ
が死せる事我語り告ければフロイン云レサ
ノフの死せる事は幸なり若彼生て居なば
和蘭人は間せられたる我何程か懐ひ悔む
べしとリコルト其仔細を問しに彼又云往
時和蘭の海船按答非亜よりアムステルタム
（和蘭都府の名）に返らんとする時海上に於て我邦の海
船に出逢て是が為に奪ひ取らる此玻尓都摸（ポルツモ
ウト）胡多に引来り常法の如く其船中の書札
を取り上けたるに按答非亜の長官より

本国に送りし書翰あり此は日本長崎
に在留の和蘭人より抜答非亜の長崎に送
れる書翰中の事を記して云ふサノフ日本
一件也し時に彼和蘭人は既に入て通
辯し大に和蘭国の為に利益得る事を
なせりと其故は日本人に俄羅斯国の事
を悪しさまに繕ひして俄羅斯と交を断し
然毎ひ日本人来るまゝなき我の為なるさ
し然る所なりとあらしむし頭目より亭此事
を変て葛摸汐都加に通ぜしめて我政書に

謂へし而して更に亜墨利加の俄羅斯商
估の仲間へ生ずるも皆等事に於て心得おく
らしむ

彼又云其の事なれば何也へ説し告げ或はやと云ふ
然て我が為の事に能て和蘭人の関る事何ぞと
いふのさぼ傍也へ及ますては告げ誤りしなりと云ふ
告しは旨として今又我が為と日本人の吟に和蘭人援
ませて害を為さんとする事に於て懸出てありて和蘭人は元
より屡々東西印度にて交易を為せども其の如く
其損して信義の交りなき事諳厄利亜人に又

はゝきされて我等も嘆しめしたれは彼か貪欲甚しく
猜むる事甚しくて天下の諸邦に亘りて人を虐
ひ悉く滅すへきの基にして帰りたる上に於て彼書
面に依邦の朝を記せる事は此まてしる欧羅巴諸
ハ今は解されしと書せ置る由へ已にと云ともはんの一ケ
定ての泥ひ甚しかりて上ても日本人に議し彼等
も大に心を労し我等も力を竭して漸く成せり
又ホーミトフの書にも斯の如し来ひ譯を本人面
しとて甚しく困難なれは葉とも多かりしなり
和蘭人ゴール云此に我和蘭人に羅氏負

せらるゝにこそ我邦の人心を痛むる事な
りぬ若し欧羅巴人自ら我邦の人に對
して如何誹謗せんにも甚だ於て恥へき
なれとも彼等と又は諳厄利亜人より傳
聞せしとて彼等か危難に逢ひし所の自ら
解（トケ）にあらせし事なれは予も慊して絶て
然ならは

日本の役人自ら我に告られたる事

或日一官吏來りて云けるは我等か事情を政家
に達せん為に王都に告達せさる事能はすとて

り侍るか所持の物并に書籍なとも都に送りて
上覧に備ふるなり其書籍の中に侍る閑暇もと慰む
る書を看んと思ふにもあらハ撰み出し遣ハし
とて彼書櫃を持来りて予に撰ましむ予その内
見んと思ひし書籍を撰出しけれハ其書に何や
らん記号をと附て元のことく書櫃に納め持去て
一冊も我手に止留まれハ残る冬中大に手透
となりき
右の書籍を撰ひし時に熊次郎一の書冊を
開き看しに其書の中に毒色の小さき紙に日本語
あら記しけるものありて熊次郎に見せけれ
ハ此ハ日本の伊呂波にも附けしものなり
嘗て当国摸湖都加に在し時魯人より贈りし物なり
とて予に見せけれハ何心なく彼書の中に挟ミ
置けるなり熊次郎是を見て此は何事なるや
て此書の中に入置きしやと問ひ予答て其ハ支
那の物なり予此書を看し時挟おきしなり
たるなりと熊次郎是に支那の物なるやと云捨
とし是を懐にして去りけり是に因て予甚た思
惑ひたりしか此小札まてみなの月許の審訊（きんじ）の起り

来りたる人は日本人を見て我等がホーミトフの
国俗とし彼か日本まて掠奪し侵害せし
昔を思ひ出しきり嗚呼天なる哉何ぞ此人なる我等か物
嘆かれ彼を因て諸物を興えしむ如何
なれは予か船中所持の書籍七八箇ありしかまて
此書籍をデイヤナより送りて翻し適当に此に
於て彼に見れゐるとは常なるまたや我等か常
に徒らにふ我等の為の上書全く戯作物語に似て
当時男子は英雄の事ゆゑなりしと云しか
殊にモールは年少なりし美男子なれは今彼に翻て

伝に聞く戯作物語の好男子なれは日本の美しき
婦人伝に心酔して我徒まと尊きまてし是彼も
直に俄羅斯に通して日本に実は天朝の戯作物語の
実事なるとのあり但し其国の男子か録しゝのミ
日本都に趣し官吏の豊なるは武藝か善なれは
時出し武器我等に開らさせ欧羅巴人は剣を
帯し帽子を戴し作法は何なるや其風を示し
更に又俄羅斯の官人の帽子を戴して官の所に
より出て棒と又差別あるやと尋ねし者に伝に因て
其戴き方にて差別あるに事なし人に其言に任

ある起或ハ飾なるハ様子義しき事もはかりかたしと彼
又国水主ハ如何にも帽子を戴けやと

此帽子の事に就て思出せしハ郷の者の事なり
クナシリにて傍の者に語りし時の事なり
帽子を持ちたりし此を地に落せし後に
日本の兵卒共に立て刀を以て其帽子
を手にて切払ひし兵卒松前にて守せる
せし時日本人彼帽子を持去りし水主
ともいへども銀の合せん事を待たりしか
針と鉄刀なけれハ補ふ事能ハさりしと云

されハ日本人ハ彼の針と鉄刀を共に得て水主
共に銀のかけて彼の器を作りて帯思ひける
なれとも補ひたりしハ日本人の手に及ひ遂に巧
なる人に見せし者を帯せしハ是を王都に送
けるに魯西亜人ハ帽子を切り裂きて
又自ら是を補へりと云ひて兵卒の器を
覆ひ人の為なり 此は田りて日本人の便利
なし 奸猾なる事なりとしる
奉行又是を合はせ 魯西亜人の身の丈を記し
王都に送りて後に此帽子の尺にて作りたるのなる

さは度々たしとて只せとて度々しめんと言ふなり
像を写しし王都に贈んとて人々に寄して画かし
むかし図を好し画きしかや否を知されともかの王都
に送りて壁に掛るとまさ知らさるなし

我国の三人の政羅巴抔へ入しは中等の者抔なれ
とも日本人に渡されは甚ちなるかまし文
何かへるかれ其の像を画かしと思ふに
都府なるそれは男職の者の像を写しとそなる
るや

借王都に行つきし官吏松本出立の二日前に我居
来りて別を告けんと云ひし五日王都に至りて遣りて
伝来り謁成達せる後に計ふ何きに筆まそ
堪思ひ致る画しと頼て送れと言ふなる
名称をとも又て王都の政者に告へきなるか此人其
第十二月の末 我十二月の末 松本も出立して此時クナシリ
にて来るる全して次官と共に官吏の人と共に
行かれしといふ

此王都に陪する長官はギンミヤクと称し
松本の者行に属する官吏五人あり
二人の王都に行り二人は松本の者に居り一人は

箱館の上官より暇を給りして王都に帰
るなり

彼官吏の出立せし後ハ我等も閑暇になる事
しと思ひしに左にあらずして前よりも日々繁劇せり
其故ハ貞助日々来りて俄羅斯語学ふへなり
此男ハ善き性質にして聡達なる者なれハ然頃
郎より嘗て学びたる日本の事を我等に教へ貞助に
聞かせ然れとも常に彼ハ我等に日本の事を
告る後ハ一二止めしもあり
昔貞助彼王都に居るラックスマン人名

の事を我等に語らんと欲しに然るに中方
より耳語（さゝやき）せしかハ貞助其意を止せり
貞助ハ日本人の内にて最も我等に親しみたる者にて
又別て我等に種々の佳味の食物を贈りて其
外にも種々恵みありしも彼ハ我等の計ひならんとて彼に
謝せり彼ハ専ら此方にて書記の役をも勤め政事
の道にても聞知る事多く専ら外の事を知らんと欲し
我等に従ふ事の多くを隠（ひそう）すに頗る事も有ましく
此く但し彼日本の事を種々の間をも話せしの
我事の心をも能しあり其上に争ひ論せる事も

多なりき
我等は既に翻譯の事は免されたりと思ひしに尚
此事に追て種々の不審を抱きて翻譯せしむ或
日見せし日本の地図に書せし所の成持来りて予に示
せり 此者ホーシトフの記せるものにて即ち此文
に云 俄羅斯の副船ジユ（ホーシトフの本船に副し来る船の名なり） 此所
に来り 此村を疑村と名付し記せり ホーシトフ
此を銅板に記して此村の所に掛け置しと
彼か文に疑村と名付ける義を示し由あしと請く
り 我等此銘問に惑り 大に煩悶せり 日本人

彼疑と云詞の義を解き得ず 彼か日本人の詞にては斯の
如き意味の此詞を用ゆる事なきなりと案するに
かくホーシトフか名付けるを如何なる意味なるや
又日本人の此隠語の何に含むやは知り得
国にて予め出の語を疑と云義の外別義なりしと思ひ
名れは日本人に創の称を起すと云ふ意味あれ
とも我等が害となるへき事を恐れて言はさるもの
とし 我ある此事に於て然る事あり 其後予幕誌
を抜書して譯せしむ 且つはニフックスマン人名なり日本に
来遊せる者あり 其后水夫ニケウルホイク名病を患て死

せる也。子モロといふ村にて、按針役のロウリウウといふもの
所にて一樹を切りしに、其木に字ありと見えしよしを上に表
せしものなり。予此也。翻訳せしに、僅に所付
ましての彼にいふ。得せりと思ふに、其詞は已に ラツリ
スマンの時にも譯せし也、其事に我国に譯せし
也。しかるに同義なるもの也と書へし
日本人、多くは翻訳をもて、しかも甚しき所常にあり
ることは彼の好む事と称せしとて、尚多く改めし或は
レサノフが日本に来りし時、世に俄羅斯帝の名は
記せし讀書は出しに、其文字譯せしを読みし事は求む

なるまで已に毎語譯字なれば、且譯するに、字音のまゝ書なり
ところに日本帝の稱呼あるは、能て彼国にはあらさ
日本と云語は、分りたれども、日本帝の稱呼とは
るものは、我邦にて皇帝と称する事なり。欧羅巴人の
何の所より此名を借り用ゐるや。予問ふ、日本帝の本名
は何といふや。彼云、帝の甚だ長くして記憶せずと
彼其帝王の名を隠すとみえて、推て問へども答ず
の稱をいふて、実の名をば隠して、云ず。蓋し日本
の如きにて臣下として此時在位の帝王の名を知らず
事秘して見る。是故に国嗣たる時の名を即位

の後ハ除せらる事と定めたり

日本人ニても姓名あり但姓を先ニし名を後ニ
唱ふ假令ハ上原ハ姓なり熊三郎ハ名なり
右を上原熊次郎と唱ふ然とも常ニ姓名
連て唱ふるハ稀ニて只其下を唱ふ事なり
又尊敬せる時ニハ其姓名の後ニ サマ と云
語をそふ 我邦ニて ゴスボデレ 君と云義なり と云
語ニ同しけれハ其姓ニても名ニても定りなく
くせ語をそふ 假令ハ トノサマ カミサマ
オカミラサマ の類 テントウサマ とハ天日と云

クボウサマ とハ日本の國政を總督せらるゝ王侯
云 キンリーサマ とハ日本僧侶の事ニて總裁
せる帝を云 オブゲウサマ ハ我邦のセ子ラ
ウ 館名を云其他の稱号ニても サマ を添へ ギ
ンミヤクサマ とハ稀ニ役人その サマ と唱ふ
事ハ同し傍ニ有れとも是をも書き記するに用ひて
筆記ニて書體異なりと云り
右の儀ニ付て我假羅紗の都より日本ニ贈らる
諸禮の品目録記せり是を我家ニも甲比丹 クルセ
ンステルン 各人 記録ニて已ニ知れり通事 我家なるニ

其余を譯せしめて後彼云るは此度持来る巴旦に
香しき稀有の記録ありて其形状大小生産等まで
記しありとて此書を示し其大意を説き聞せしが總て
只本人の恰利其指揮によりて彼等之事を穿鑿せん
と致さるる事共甚だ委しく云る事を聞しかば遂
其事を聞糺さるる事なきにしもあらずとて其言の
如く然りしかと云けり
右の諭書の譯終りぬれば又貞助熊次郎一二
欧羅巴の書籍等を持来りて其譯を求めし毎に
其を傳ふるにも其限りなき精心にて煩はしきにも

又其舟に支那にて画きたる廣東の図中に
て欧羅巴諸國の商館に標せる幟章ある所示し
て何故に此所に欧羅巴の幟章はあるにやと問
しかば其理解を説きけるには彼又何故に欧羅巴
の商賈の居る港に入らん事を願ひ出年々間
有りしが共に欧羅巴人は何所の人にても免雑ある
時は互に出船くるなりと云ければ彼共に許しけ
據ありて

保和に廣東には洋船揚湊の港なる故輸
り大國の欧羅巴の商館を許されしまで
にて其他の船間なきんは知らず
又其外に通辞といふものなし

貞助又一書ありて同の大砲
の銘を示して云ふは和蘭陀の物にて百年以前

我邦より朝鮮を攻め勝利を得て凱陣せし時に此
大砲を奪取し来れるなりと云其銘を見るに
今を去ることより僅に百年前和蘭の東印度商館
にて鋳造せる者にて羅甸文にて記せり予窃に彼国の日
本人の勇気のたえなき事を感嘆せり其砲文
レサノフ長崎に渡りし時に其船ナテスタ船名の徽章
を写しとりしを聞えしに日本人の書せるレサ
ノフかペテルスブルグより日本に来たりし海路の
總図を示せり是を見るに箆那(デーエ)瑪尓加(マルカ)諳尼利(アンゲリ)
亜加那里亜(ヤカナリヤ)諸島伯西里(ブラシリイ)カーブホールン マルケイサ
諸島葛摸沙都加(カムシャツカ)及日本まてレサノフの航海せし
処の諸国を載たり是ハ尋常の舟師の作
述するものとハ見えす其経過せる所を唯度数に因
て所々の距離遠近を定むるのミにて外に徴
あるけれハ精確なれ日本人ニ於て恐らくハ益あら
さらん
或日貞之助欧羅巴の書成日本にて訳せし冊数
部を持来りて是ハ王都より送りて作せる
示し是を訳しまた説をも添へしとその序
其作し其説の意を書き載せ政府より作せる

の影なりとも許されずして強て頼みせしむるも
心を尽したれば其国にて緊要の三冊を訂正せしむ
是し其化は急にまとまるにも及ばず尚しければ重て
時を得て余さず寫しとなりて一の書を出して
是に示す所是を見るに其一にヘシヨウスケイら
遊歴の紀事二千七百九十九年（我寛政十一年己未）係る
羅斯人ヌ語尼利亜人の和蘭書を抜役の記事之を
俄羅斯國誌なり前の二冊は貞助も随て常に見る
して抜合成せしめ俄羅斯國誌は貞助一通り
示すに譲りみやけるに其氏一枚毎に示す考按訂

正を入させ余の家のうちにしまいたり其国誌は往昔俄
羅斯國未だ外国の人と開けざる時にて外の
俄羅斯國とは大に違へる事多くありける故に
日本人は是を見ても古昔の法に拘泥して其を要
とする事なき風俗なるに俄羅斯國の僅か数年
の内に大に風俗の変化せし事をば会得せざる
ところなり
日本人の心事にて我事を心の及ぶ法のみにて
関知らんと欲し貞助其行の常なりとて其ら其
役を示さん事陳述して云うるを長崎の奉行は

和蘭人を呼て委しく其奉教の事を尋ねけるに
紅毛部よりは寄て事を行ふに彼等の害となる
さる程に為しけるにそれより関東にて裁許
法の礼式並に十戒及経典二三の教法説明せ
させ日本人の尤も此等の事の取調ることにありし
とみえて貞助云ふには斯のごとき事をキリス
教のごとくなれば何も其教を奉ずる人にても信心ある
る者は此心得難き事にして其法を破る事とも
已に知る事なりと
日本語にて人の心に勝るるとの我黒

き心ある人にはこれ信心なきもの成我身に心
ある人と云ふ也
蓋し彼の望む所は我教法の作業法式の事なり
日本人にても我国より久しく此寺にも居りて
其作業をも見知りたる者ある者は寺僧の教戸を弁
閲し稱を指出せるの事何をも標示せるの趣我
知人と思ひたるなり仍て予貞助に向て云ふやうに
我教法の理を説き示すことは我等より日本語にてよく
解し得たる者にて我の詳しさを能く解せざれば其深
意を説き明し易し能ふるに今故に二事を欲するには

是まと説きけし分ごし互に是非を辨じまして

是まと説く時は大ふに理あるとせして神聖の教を

知らさる事に異なきんも惜むべきなり此事を思ふに

其教の能きをも不知と云ふれども日本人にはなき所

古よりや正理を遂し廣く當法の事をも聞ひけるあり

我國の内にさて其事の説を守るべき力ありもの

なしと云へり

アレキセイ又日本人と云るクリル諸島の事を聞

ひ是其國をも遍く彼の云る所の島々海港等をも

問もし見しもの人彼も常に嘆きなり日本人

彼に云けるハ凡我國法にして異國の人来る時ハ

其事共人に聞ひて虚実に拘はらず悉く書記し

て其の纂考し其言の虚實とを分ちて非常に

備ふると云へり

遭厄日本紀事巻之五上畢

遭厄日本紀事巻之五下

杉田豫
青地盈 譯
高橋景保 挍

奉行より新しき衣服を贈らるゝ事

我等か事に就て都より命し来れる事ハなきやと通事に問ふ毎に未た何の沙汰もなしとのミ答へ只秋冬も上述の如く偉傳ハしんとを以て第一月（文化八年辛未十二月）に至り役人来りて我等に告けけるハ奉行所より別宅に移し諸事も是より改まりて尚

好ミ過ぎたるへし日本の正月にても其事を歎息せし
しか我等是まで先達て出られたる者等よりも
聞しかと彼等か国に帰りたれと只我等を慰むる
為に有らんと思ひて言れたるまて其外にも様々尚帯
留せん事ハ朝もなく郷を願ひしめし也し
早く本国に帰されん事を祈まつるのみと其後ハ
第二月 我文化九年壬申正月 の末に成條々有り
新年にて奉行より我等に新しき衣服を贈る
んとて其色品及仕裁等の事ハ先ず尋ねしと称し
我等其好む所を述して着る服を我等か十五年の昔の

物を望みけるに程なく且国の事まて衣服の好み
あるへき様もなし此服にて事足りぬと辞しけ
是とも其所より兵部に賜る有るきの意なりとて通
事に命してヘレブニコフの様子を尋ひ衣服をつくし
とて数多くて其衣服を贈り来れり我等二人に
ハ同し色の羽二重にて綿を入れ裡ハ赤きに黒つし
無き縫色まてヘレブニコフとモールハ常色なるし
モールとヘレブニコフ是に此様なる服を着
せしか帯ハ段の結れハ奉行より人々とて
何者も贈る所の服を着せしや甲比丹ハ

其属下の者に同色の服を用ひさする由
と聞へり 予案て 俄羅斯に於ても同
色の羅紗の服を着る事なり 但し其品
級を別つ為に外に表章を著へし
加之 尚様々や別に他色の服を兼て
贈りけり
此事実ハ原色の綿布に綿の入る服を与へ
凡て役より贈れる服の裁縫粗くして 撰擬(もどき)に
出せる服にて似も 俄ら日本人の好も比へて其
拙きを笑ひ 俄羅斯の巧なるを賞せり

日本人クリル人を殺害せし始末并日
本我等の事

鄕に定居の様子語れる所ハ看る事常に其
人倫を辨へ其に性を固て何等[illegible]し難談
あるとして甚しく親しく時として業に生じ[illegible]に悪あり
然れども甚しく穏密にて上官の許可なくハ猥に他
を贈る事能はず凡て日本の法にて要なき
事も甚しく深く密にして万事を隠して風俗なれ
とも凡夫の情に於てハ[illegible]事の序に語りし
て大いに心知れり 或日クリル詞を知れる看守

人の役りけるよてホーシトフのエトロフを擒せし
時其徒の内ヘル　シャゲル（按ふ俄羅斯境内種族の名）の人ホーシ
トフか船の出帆をし行ふ海ふ放て廣急ふ逃り
来りし依日本官人の許ふ来りてクリル人ふ縁をて
刺し殺せしより　俄羅斯の事共皆出しつき
候を失ひて苦しく彼を殺さしめ俄羅斯の事実
も詳ふ知られて日本ふハ俄羅斯との咎も深し
私ふ渡し候事も加ふる不幸ふよて悪ク候ふしと
云ひて又其時候ふアレウチ（按ふ首模加都加の東海中一帯ふ散在せる諸島の名）の人ヤコウと云者ホーシトフの船を逃つ逃

サカリン（北蝦夷）ふ在しか其地ふシケウルボイク（島名）を患
て死せしを彼か語りしよて魯西亜か究を解く逃
き彼ホーシトフと云ふ事あし嘗て彼かホーシトフの船
中ふ在し時俄羅斯人等か彼ふ政府の許し
あらて高銀をとて日本地を荒しふるハあらき
る事なりと魯国のたりしと彼ハホーシトフを悪む
ことを甚しく日本の官人ふ兵器を借ひ其ふ海
岸ふ恩ひ而して再ひホーシトフか上陸せる依眼て
彼を刺し殺し已か怨を報ハんと云ひてしかし
彼か如しホーシトフ彼所を起る趣ハ嘗て船中ふ

存しぬるいつしか国に破られし後ホーシトフ寄せし阿
寄せし故なりと
其後員外すらも呼ぶに皆同様なり蓋
此の事の信じることは無き
アレキセイの考ふるにペルシヤケルを殺せるはクリ
ル人にあらず此は日本人のなす處なりクリル人あらず
日本人の許に来りて恣に彼等殺せしきの調べならず
しと云ふ故は数年以前日本人松前の山の北に
住居するクリル人の事を殺して力を以て使役する
事能はざれば詭計を設けて和睦をなし其

歓の宴を催して大に饗応を作りクリル
人の四十歳以上の者及勇猛なる者に飲食をふ
るまひたりクリル人は酒と食とを好めは此饗應を悦
び飽まで飲みけり日本人は陽（いつは）り酔ひて[illegible]に至て家
に帰るに皆其席を離け尽し其家を出ると
直に外より其戸を閉ち彼等を出さぬ様にして壁
に設けし孔よりクリル人の家内を鎗にて刺し或は
弓箭をとて悉く出るものを殺し其首を斬り塩漬
にして王都に送りて其勝利の證となせしと聞り
秘密なるアレキセイの此話を聞て一同に戦慄し此の

如き不仁なる日本人なれ共我等をば如何ならしめん
なの如き憂き事すも逢んとて何共免と其
アアアレキセイ又云けるは此事を承り合
候へば誠に憂悶をつくし思て啼まて語るさ
まし給へ又此如き此度の事日本人なれば
まする文けれとも憂き事を悔みても詮なし
と銘々了簡して未だ是迄の難儀なり正に其事を
申されば忠節なる事なりと云し
から我等も亦今日を待つや否他を経さり
き第二月八日日本の我等なり申されとも命知らる
の我等の事を言も出し此は年頃の後まで事
堅く成り我等も事成り思ひ出しけれども此月の中
頃まで約束の事云出しけるとて候
ち居たり
日本人は年頃の如く我は呑ん正月中
何とも見えず無益も共にまかり新年
より満月の習に二十日の間より此頃は裁
判所も開て体に存する人にて互に法事し
唐土の祭礼をも成し後の宝月より漸く
己に職業にかかり年頃もまた第一の

祝として人々新衣を装ひ家々に飾り
市井の表示ある人々互に往来なし其
府々何等の名をもなさず皆其家を以て序なり
を悪むとなり其れより通ずる後看なる人
等を以てすれば小様に姓名を書き或ハ年始
の書翰をさし遣しするなり是を名草
とハ其待ふ所の家に至て年玉の標とし
自他我等よりクナシリの友人に贈る年始
の詞なりとて[illegible]倭し思セしに其大[illegible]
ハ舊年の安寧を祝し又新年も太[illegible]

まして是互に吉祥なる事を祝し
安否を語らん事なり新年と云ふなり
然るに我等か敢て此の如く待遇せらる事ハ
て聊か文雅を知らざる者暗藤の魚園下の如くして勝る
るまでし新年五六日の間ハ家々にてもとより通
事なくても其れハ其通事来りて挨拶何の其
みなし事ハ皆官長より当所より嘆くなれ
ハ能其頭にて来る新年へ移りしめ其挨拶
ハ其れハ魚隠の家共にて海辺の人民悉く海に出
て事楽しく彼新年ハ四五日の間雪を掃きなどして

新驛まて雪に埋れ居る所を雪を掃ふ人々あまたに
まて遅延に及ふなりと此通辭こそ實に笑ふ
為きなり此府并凡五萬の人口なりと以ての外
はなはかりの事成る人なりしといはんや虚妄なる
を欺き慰みあまりて伴當の学問使なりとせんとは
る者なるんと思ふまし成遠く高れハ彼笑て去るハ全
く伴當の心得違ひなりとぞいへり

我等に書籍を翻訳と成せる事 并 出
奔創意の事

我等か別當に移さんとて東行するに二の患あり

一 先読へき書とて我等か所持の書籍二三冊を披
け一ハ聖書を翻訳せしとて翻訳を世へてる處
久しく聖書を翻訳させれハ甚た長くなれハ初の程
ハ聴へのさらしめのハ怪しと成りて尤のこ翻する處
しとも思はされけれハ ヘレブニコフ と云ふハ翻訳ハ
望みなし聖書ハ翻訳しかしかたしと云ひて夜て
聖書翻訳するにハ官吏の并看守人等の無ひ疑ふる
所まて翻する事なり是ハ若し自殺せんとするも計
らんとてなり

ゴール 云 翻訳まて不言に自殺せんとと守

られたるも自殺を極めたる宣言をも
嘆ぜらんや
荊刀を指揮して各自に銃殺刑すべしやと問へ
る時予とヘレブニコフハ銃殺刑の宣告も
又て云ふ我ハ本件係なるの銃殺刑にする宣教
是へと取所予等にて本件の任ハ我等か許して
事の実否確定に於て法に依て弁理あるべき
に銃殺の有無を未決の内に断んや乃ち日本人
よりの待遇ハ仮餝なく実に言ふ処に依て本件
の證ものなり何するも背く命令を以て偽国の

取ても亦た者ある者ハ銃殺に荊るしと云ふ法令事
ともなきしと云へれハ尚寛恕して荊ら為し
と責付せしとも假令本件の不直を成したりとも決し
て銃殺ハ荊すましと云ふならぬ
此須通事より此事を承けるの上のすハ甚か
ら無用の事にして来ハ貴所云ふる時ハ松前の役人
並に松前の役の人々ハ依宗する弁解の依宗なる事
を知れとも予郎の者人々ハ松前本件の云と相違ひ
拾備の将にして上通せる能はさりしハ承する所
若しも十分に通弁をする能ハず並に告状の書

すまも無く解しられてあるまじと云貞助に
日本人には兼て我が事を思ひ居るやと問しに其は
何とも定かならず今も尚知りがたしと雖も元
後には皆免さるゝ事なしと思へりと云ふ彼等は
我が国の法にてはと云ふなりしに彼等も其様に
しられとも皆我が国人の魂を見ると答ふ
すべてとても日本人の免しは後て強ひて言ひ
出来事を知らず恐しと思ひて我らも此は甚だ危
然の難き事なれはモールの及水夫のシイモノフと
ワシリエフは聞きたるに唯尋ねたるへヒブニコフは語

て此事を遂んと思ひて我等はモールに向ひて家
に在るを遁れ出て海浜にて一つの船を奪ひ天の
助を得て力を尽し首領都加鉄の薩靼の海
浜にゆかん事も叶はず成果ぬとも何ぞ仮令
海上にて死するとも我国人の手に渡て殺されん
よりは命を捨せんはまし楽に獄せられ命を終らん
よりは本意なるべしや抑此事は実に危しと思ひ定め
なき計に似たれとも又為し得べき事ならず此
らし既に日本船の難風に遭ひ我が国の海浜に
漂着せるを数々得たりなどと説きけれとも

モールハ因党せし彼二人の為めに共に害せらるゝ事ハ
計らずも遁るゝ事を得たりしかと猶さる故に必
等思はぬ患ひのあるを以て又も此我等の企
ありのんと恐ひまつり日々各々食物を集め蓄へ
給仕する者に隠し夜に入りて是を能く小さき
袋に納て貯置たり
漸くまたひ挽催し日も長くなりて初めて暖和
の気候になりしかハ第三月 即ち二月 の初旬より其
我の許まて我等を牢の外囲の庭にまて出て歩く
逍遥せしむ此月の四日 即二月 貝外出させて公せ

るハ俳等を赦して王都に至らしむる事成りハ速
に政府に事実を詳く説し我か心に其怨るへし
依りて事に就て誰か人身を引受て弁解せる
者あらしとて王都の政府皆て撰して ホーヒトフハ其
王宮まて日本地を離れ此俳等を囚しし日本の
海港便宜に我を奪はれんとて来れる者と思へハ
なりと我等を逃さる如く云ふ此後我等を王
都に至らしめんとの気あらん時に当て留さる
様に謀めあらを隠さる為めに身を衛り諸に ホー
ヒトフか初度日本地に到着し時二三の日本人を

捕へ送りし蘭国模此都加にて多くとる也し理事リッセ
ル蘭山 保梅ヨリイミリの説之 ソーヤの西善三郎ある まて 杉田の甚紀へ贈
る書多く我も送り出しけりと其書は誰より
送れるとは云ずれとも其内の個に嘗て我ホに問
ひける仏蘭卸語を捨て書けるに其書井の
語あらしと思ひけるにリリル人其書を持来れる
由なれは定て彼等に通翻せしめける事とこそ
我等へも是ハ何の書なる事を此にて知られとも
家々其ことにホーレトフの義をの教を教授毎し
今考ふに其書簡の趣意は既に会して解せしかと

て只能なれ其人家共に伝りし来て我か数々辯解せ
し後此書を出して語りし其室実を説せんと
きる本ちるへし其時に我等か羅あき事如
何説き明しめんと語り合て言究りし時モール
各自の上の危き事を計りて共に出奔せん事
をも許すに然る由てシイモノフ ワシリエフも
其心を書して同意せり時にアレキセイをハ其身
甚へきや彼等も同じ意成明して共に出奔せんに
他し個して残しおりんり若し彼の残し
置ハ落し 新書せしを進ん残し置ては我等

其外に世を遁れし出家の事に於ては彼に勝る
事き此宗を廣め尽し其書宗を著せし事
多し能海に其頃モール云る者彼を我今此
し其子将て去らん彼は彼の草根を能く知る
其上食用の便ともなるべし此地の海路に精
しけれは大海を渡らんと此に角てアレキセイ
に其今此を告けれは大に驚き急き来り彼に黙
やしく聴して云けるに其も出家と同し常に
に仕る者なれは吉此に抱へ其に出家し假
今海に溺れ死するとも又日本人の手に死せる

とも出家すると死せる其子は大に悦しと皆此言を聞て
其より出家の法衣を着け彼に従ひ何れも其子
其今此を商議せしより此事なりき

出家の密議并モール變心の事

備へ宝内を逃出すに二ツの計策ありし其一ツは
常に宝の香を求め大都を出る人に我出家となり夜
宝に於ては怪しまずして出すべき事に成し
り其後急ぎ陸を離れて多の海路あり日々着岸に
至り其人の更にさる事計りて十分に破を乗せ
り其に因て時に風の便よき時を待ち不

云ふに出て彼看守者を待ち其口を塞て我等
散出る事あらんと見え彼等が刀を奪取り柵
を越てそれより海濱に走り出て一二の舟を奪
ひ韃靼の海濱を志し漕き出さん然とも此等
成就は覚束なしと思ひけれど策あり即ち
看守する者ら寝所に至り戸を閉し熟睡せる我但
此守全く眠り音も絶たる一隅に小さき門あり是
ハ掃除の時出入するものにて常に鎖しされハ
前にて盗み置たる小刀にて其程の錠を斬
を切り戸を開きて遁れ出て水夫の錨師庫に
て縄梯子を造り是を以て墻を越へし然し我等
此等兵器なければ我等ら衛兵に勝たん用意とて筆
を執て鎗に代ゆべし
クナシリにて上陸の時奪はれたる小舟の帆
のありしまゝの錨綱一條の在りけり修
とありて此帆を以て船を走らせんと
て日本人に乞ひ求めけれども無かりしかば策
錨にて錨綱を水夫に無くしてしまへ此
を以て縄梯子を作る事にしと思ひけり
さて其便りよき事を待ちけるに第三月の八日

秋二月八日東風吹て西南方よりの大嵐起り此風数日
続きけれバ艦船の海濱に在るに皆破損せり
ハ船中人数ハ我ちとも思ひ其外家に心安かるへくせ
しよ者も多し 心ふさて有りしか間も無く天気晴
て日本から追き風も悪敷なりけれバ是非なく其
まゝ思ひ止りぬ
其後二月ほとて又前の如く風吹き気ふ候の天
気なれハ予「ヘレブニコフ」と議して明朝こそ
本国へ戻り帰らしと云しか「モール」議する心変
其や我等か命の是非を論せ只唯自ら出立

して運の尽るは我等定し云へり予是を以て
船幾十人の従者諸し誰も有ると無く酒を飲ても舌
気を変して予を小児の如く云と云りかるまゝにい
「モール」不しと云も我等に逆出する陰する事
し此故に語ひ「モール」は我等に同意せ後
其の心ひも其を何と云ても「モール」と西方
面あるまゝ
如し「モール」に意ら心変りせしより我等も通
け渡ひ後に見てるても我しく閑へて旅しく
等にせり此を以ても日本人より甚だ難し

従事日本風に似せ官吏と称せらるゝも政府にて凡
そを以て自ら謙遜し彼に従属せる者のあらして
日本人を学ふ為し其追随せる親密に敬まし人
ら無きあたる事のみなり
モールらかくの如く振舞ふまて我等は甚た思ふへき
事とならぬれは予モールらを制して此者を
漸にさせしめ且モールに語のかふぬ也故に彼を
此者にはなく関する事なき趣を書して其以に
告しまへしと思ひしらるまゝ以て其後此にあて
モールに其事は吾等かくしとてモールの指令

かゝる事なるへく為をあけるまゝ是に由て予再
ひ然して一先彼と和睦し陽に彼か従に従ひ出
者の事は思ひ止り天運を俟者の為にとて示
出来し当て通事の告しまゝを暖和の為候
まゝしは家等を日本人の為にまて為井の示し
とも尤も相応しと若し其時為母に出るを
ほは出とを奮て通したるまゝしたとれはモールに
婦るまゝ心かくまても示し危き事も何事しと
密に示しつゝて其事もと約ひたれともモールは為
心とはし陽言をと抱けり

間宮林蔵を以て説諭を為せし事 并

松前奉下道過を許せし事

余は間宮林蔵と云者を通事使ひ来りて告て

云此人は星学量地の術を知るものにて江

戸より来りし者り政官の指揮にて蝦夷地の

醫者の者にてエゲウルホイク（病名上）を治せる薬

剤を我に来れりとて出して示せしを其二の硝子

罎の橙汁と少しの回青橙（だいだい）香橙（くねんぼ）并に香気ある

乾きる薬物なり此を少し液て我等の飲物に加へ

用ゆへしと云り此得を以し其後より後て砂

糖四斤と蕃椒を砕きて黄くしたるもの一箇を贈り

来れり

其外蓄へて居る所持の樹木の実の類贈

来れり

予察するに此者の性を賂りて量地星学に長

の術を施せるを学ひ人と為す其の心に感し居

かて林蔵測量の器を出し示せしに其内諸尼利

亜製の銅のセキスタント羅針と設る地経盤

及測量に用る水銀を入りし欧羅巴製の此儀器

をも用ひられしやと問ひ然る所にて彼か示す側

量のため旅行せし土地并見聞せし風俗
等の事を語りたりしが我等も大に珍しき事
と思ひ聞けり 彼は日本にても天文術に巧にして能
く諸方を遍歴せる名ある者と見へ 彼が四境
を跋渉せしにて日本にては甚だ高貴の者と称
せり 彼が跋渉せし所はクリルの第十七嶋 サバ
リン（北蝦夷） 満州地の黒龍江まて到りしと云り 彼
が旅途に携へる所の食物を直に煮る鑵たりしとて
示し 我等が嘗めて食物を直にて自ら食し 我
等にも與へ又米まで携帯せる焼酒を出し
自ら飲み我等にも與へたり 水夫等甚だ此焼酒
を好めり 彼セキスタントを以て日の高低を測り
本地の緯度を知る事を得るは和蘭書の翻訳せし
物を以て其術を考へ得しと云り 我等其書示さん
とせしが詳に考ふる事能はざりき
間宮林蔵が語にて我属下の日本と互に往来
する由（彼我のクリル人互に往来する事を云）を聞得たり 前に嘗日本
人より聞たる事とも我等に詳説せり
扨て林蔵に逢し時彼は日本人中の博識（ものしり）にして
且学氣ある者と聞しが果して 彼が語にホーヒト

ノの擒となりし時エトロフ島に在て其同僚と共
に山に逃入りしに俄羅斯より放てる鉄丸に中り
たれども急所ならざれハ幸に差なかりしと然とも
一人の同僚ハ俄羅斯人に捕ハれしが其後放されて
帰りけるに枝源ハ其後役所より廃業せられし
と云ふ毎に自ら誇て云ふ彼ハ日本人二艘の船
を以てオホーツカに到り其地を其火に焼捨に
来るべきホーシトフの怨を報せんと云ふ実に何ぞ
及ばん僅に三艘乃至三十艘若くハ三百艘の船
を以て襲ひ来るとも一艘も益なく追返すべき

成べしと笑ひけれバ彼不快の色をなして日本
人ハ俄羅斯人と戦ハんに為すべき事にあらず
しと云ひ彼ハ日本人ハ弁まで自ら勇気に誇り
て我等をあなどらんとしけれども我等ハ是を笑
ふのみ以日本人にも亦吸ふ者有りと彼日の
高さを測りて南北緯度を算する法ハ知れども
月及星の大陽を離るるの度を測りて東西経
度を知るの法ハ知らざれバ其法を我等に請ひ
しかども経緯ともに星暦の書なくし上通事等ハ
稍に此用の事を弁ぜざるを以て御理の事ハ通

辯ずる事にして辯じられは彼は甚だ感ずると不
和なりしたり彼の云けるには近き頃江戸より和
蘭通事と日本の学者箱館に来りて條約学術
を識むと為しに其内は條約の然其事及び詳密に辯
ぜしめてゐる者なしと
さて又此新事出来て甚だ快くしきのみ
ならずそれは日本人学識を以て為すも学術の師
となるさんとまける故モールは之を日本人に陽云ふ
く教へ変りけるとも度数の学は知らざれは
ヘレブニコフをと其師とせんと定む彼は此学の長

なし人なれはなり
林蔵をは讐敵の如く思へとも様子を陽に
あらはさずの事とも用ひやり身を読と殊なる
事あり林蔵云けるには日本人の俄羅斯人と仇と
なれる所以は原より和蘭人は実にこしとて彼邪の
事とも我邦に誹る嘗て和蘭人告しは俄羅斯と
諳厄利亜人にて心とを寛ふかりしは此二国と合従
して払郎察及其同盟の国と軍すと送り
和蘭人より日本人に俄羅斯及諳厄利亜
国人をも頼むへからすと諳厄利亜の甲比丹

フロウフトンヶ日本港に到れる時より
互に兵端を起せるなり（按するに諳厄利亜の甲比丹フロウフトンハ寛政年間松前海上に来れることあり）
又東方の諸邦を奪んと志し俄羅斯ハ陸地諳
厄利亜ハ海上にて互に力をつくし諸邦を手にいる
きに我那日本をも己か属国とせんと欲するもの甚猛
ハ俄羅斯人已に日本北地の境まで此城を築き
止白里（シヘリ）アトラント（保按するに亜墨ハアレウトに作るなし字の誤なりといふ）
及クリル諸島并にも二国の堡砦許多あり
又諳厄利亜のブロウフトン嘗て日本の海上に

到りし時より諳厄利亜と俄羅斯と共に軍を起し
て彿郎察を攻めし時なりと見ゆる後まで和蘭
人申しハ諳厄利亜人の日本海濱を捜りしハ
爾後彼ひ入んの企あるゆへなりと帝路雷後なり
とてフロウフトンヶ日本海濱に来りし縁故を
説き又和蘭人貪慾深き故若し日本人の俄
羅斯及諳厄利亜と交易せハ己か莫大の利益
を失ひ上の事まての如し色法なる言利を得る
事もあるましと思ひてかゝる様々の讒言成
設けしものなりと論しけれハ真ハ那ら言に縁し

てのけまも和蘭人ハ甚た利を貪るものなれハ
左も云ふらんと思ひしかとも林氏ハ少しも疑はす
此頃良斎傳へたる所ハ日本人ハ甚た諳厄利亜
人を仇敵とし戦し其船日本の海濱に到らハ
殺さんと傍手るとめし糾明せしむる為に其旨を以
サムフクも長崎に来りし事一二年前にて長崎の
海上に係居たりし旗章成ひたる大船見えけれ
ハ長崎奉行速に和蘭人数人を日本人と成小舟
ニて到りしかる時彼船の人和蘭人を尽く
捕へ日本人と和蘭人一人を成返し告けし免

けるハ此船ハ諳厄利亜国の船なり和蘭人を捕
へしハ此頃諳厄利亜と和蘭と戦争有り因て
彼を捕へ停めたるなり若し日本より牛豕許
多を送りなハ彼を許し返すへし其報を使の
皆此港の内にて小舟を度り海の底深さを量る
と云へり且之に因て和蘭人も長崎奉行に乞て牛
豕許多を送りて和蘭人の捕はれ人を免されし
なり其事情累難なること不因て奉行ハ自
殺せり此より諳厄利亜人をハ仇敵と思ふ成し
と國手に今も示しとそ

予其時官府に向ひ和蘭人ハ無患の貨物を齎
し来て便利を売て金を撒し事を知らしやしと云
乃ち日本に於て日本の宝を費す能ハさる事を
知らしむ舊例を改むる事を承引也従て齎
し来れる所の貨物も皆其員数を増加せしめ後又
此りハ又云和蘭人諳厄利亜と戦争の皆計策を
めくらし日本にて欧羅巴の貨物を蓄へんと
欲し其国属国の船を借りて和蘭の幟を掲
立も港に送りしに其船及人数の災害に至る事
るとも貨物の例とし(?)ハ上東都に減し其貨物ハ

多くし諳厄利亜の産物なりしとて官より禁し
て盡く貨物を返し其船を積ミ出し其船を返し
返せしと云

第三年の末頃 戌二月中旬 東都よりの許ありて参府せ
於此府の内外を遊覧せしむ其外猶に二度許
保按ニ凡四里許 の両人二度催されたり正月には官の恩
出六人通事一人及ひ和蘭案内役随帯する荷物を
の随従し并府中より郷導の者を出され
府より四十町許隔りたる山に登り途中より多
甚敷ハ廣く流れて(?)し此時予思ふに我に一

二の武器作りハ直ニ西道ヨリ来ん事かくのし
と其家来ヲ海濱ニ二ヶ所あつハ櫓ニ晴て兵戍
奪ひ去り申し予想ニあつ毎人常ニ海濱ニ道
遥せんて丁を望ミ兵我等ヶ敵国の様ハ常ニ身
を放さ必持けり我等ヶ在を家ニ至る モール ハ
常ニ乞て来り様すを難ニ事成也けし
て来る節ハ蒔番の患ありしと云り

日本人ハ従帯ニ長短の二刀を佩ル家
ニの小刀ハ長刀を取て下ニ坐すとも短
刀ハ身を離さず事稀あり偶ニ取て坐
二と共ニとも与長く渡来ニ渡り出れきと
佩ル家ニ短刀ハ彼ヶ為ニ其胴を離さすと
を習へし

第三月の末 秋二月の末 ニ香ニ及通事等応答云依
等也き国ニ宇を出てはや宮ニ稲を伝へし由
て移数の後て其也し陸ヲを着てへしと兵深然
此中ニ来て モール ニ向ひ新を其ニ儀ヲ為ヲ列人の
利を作ヶへきヶぬ印紙の形ニ作して可あらん
や問ふとて示し歩し予答て是ニ独ニ事を
好も示あし 日本人の意ニ任せ後へしと云ふ

日ともに随て其国を請求て持行たり

此事ハ無けれハ寡ハまて建せし事

とも云て我党を寄りモールハ国の

めし廟を作せり

第四百年一日 和三月二日 の頃より家来より無国を與

宅に遷り送し午時迄に城に得てれき其

の前に出円説者人も列坐して祭しけるを

内ニ宇より急し出して善き宅に移しも

此者ハ日本の老人の住居せし所ありしか

ども待遇も粗なる布し寡日本人と和睦し

足弟同郷の人のなし安らしと常に称り

て既に堂を退けり

遭厄日本紀事巻之五下畢